

## <資料> 「学び・遊び・つなぐ」プロジェクト

### 2020年度「つなぐパネル」講演録

石本雄真・片山敬子

#### はじめに

今年度は、「つなぐパネル」(パネル・ディスカッション)として、「義務教育学校」と「高等学校における生徒支援」をテーマとして2回実施しそれぞれ2名のパネラーに登壇いただいた。以下では、「つなぐパネル」(パネル・ディスカッション)の様子を逐語録として紹介する。今年度は新型コロナウイルス感染拡大の影響を受け、人数を制限した教室での参加と並行してオンラインでのリアルタイム視聴、オンデマンド視聴も行った。

なお、個人情報に関する内容については削除・改変を行っている。また、講演は写真や動画を含めたパワーポイント資料をプロジェクターで投影して行われており、写真やスライドを指示しながらの場面が含まれるが、文中には特にその箇所を明示していない。

#### テーマ1 「高等学校における生徒支援」

(石本) それでは時間になってるので、つなぐパネルの1回目を始めていきたいと思います。

教員養成センターの石本です。学びの教室はもうすでに2回ほど開催しているんですけども、学びの教室については1人の先生からお話をいただくという形です。それに対してつなぐパネルというものは複数の先生方に来ていただいて同じような共通するようなテーマでお話をさせていただくという形になっています。

今日は、「高等学校の生徒支援」ということでお話をさせていただきますけれども、みなさんまだ1年生の方が多いので、まだそんなに生徒指導とか教育相談とかそういった形の授業を受ける機会がないと思います。来年2年生になったら、僕が担当するような生徒指導の授業とかもありますが、どちらかというとやっぱり小学校や中学校の話が中心になりがちです。それは一つ個人的な理由としては僕自身もスクールカウンセラーとして小学校中学校に行きますけれども、高等学校に行く機会はほとんどないので、高校の話はリアリティをもってしにくいということもありますし、やっぱり義務教育段階の話というのがテキストでもよく出てくることもあって、なかなか高等学校の話聞く機会は少ないんじゃないかなっていう風に思います。そういう意味でも今日は貴重な機会になると思います。オンラインで参加の方も今日はいます。オンラインの方4年生の方も多いと思いますが、そういう意味でこれまであまり高校の話聞く機会がなかったんじゃないかなと思いますので、関心をもって聞いていただけたらなと思います。

今日お話をいただく先生ですけれども、鳥取湖陵高等学校の方から西谷智子先生にお越しいただいています。もう一名、青翔開智高等学校の方から森川真吾先生にお越し

いただいております。公立と私学という風に、違う形ですよ。小中学校でいうと、特に鳥取でいうとね、私学というのはほぼぼぼないので、かなり例外的な感じがあるかもしれませんが、高校なんかでいうと、特に県外でいうと、高校で私学はそんなにめずらしくないですよ。そういう意味でも、私学のそういう生徒の支援と公立の生徒支援とどちらの話も聞ける良い機会じゃないかなって思います。では早速お話をお聞きしたいと思います。まずは、西谷先生の方からお話をさせていただきたいなと思います。よろしくお祈りします。

#### (1) パネリスト講演：

西谷智子 鳥取県立鳥取湖陵高等学校

(西谷) みなさんこんにちは。私は鳥取湖陵高校の西谷智子と申します。今日はどうぞよろしくお願いいたします。鳥取湖陵高校ってみなさん分かりますかね。分かります？反応していただけるととても話しやすい。そこに高校が2つあるんですよ。で、青いチェックのスカート履いてる方が鳥取湖陵高校です。なんとなく？ありがとう。すごく嬉しいです。うんうんとうなずいていただくと。話しやすいなと思います。

私は体育の教員なんですけど、最近は教育相談とか、特別支援とかなんかそういう仕事が多くて、あんまり体育っぽくないっていわれたり、もともと先生っぽくないといわれる先生なので、このままでいいのかなって思ったりしながら仕事をしています。

緊張してるので反応していただくとすごく話しやすい。

私はね、先ほど紹介もしていただいたんですけど、県立高

校でいわゆる教育困難校といわれるところでほとんど過ごしてきました。皆さんがたぶん高校時代を過ごしたような、勉強を一生懸命するような学校には最近勤務していないので、みなさんの感覚とは若干ずれると思うんですけど、まあお付き合いいただけたらと思います。

えっと、しかも最近、今年度ですね、この鳥大に内地留学とあって、1年間勉強をしに来ています。最初は、今年女子大生かって思ってなんか久しぶりだな女子大生って思ってワクワクしていたんですけど、このコロナでちょっと思ったんっちゃうって女子大生生活になってしまいました。

地域学部棟の5階に大きい部屋がありますが、その横に部屋があって、そこに普段います。小学校の先生、中学校の先生、特別支援学校の先生と一緒に勉強していますので、高校の話じゃなくて、小学校の話が聞きたいわと思われたら、この部屋にいるか、一番後ろで今一緒に聞いてくださっていますので、あの人たちに聞いてもらったらいいと思います。

みなさん、特別支援の講義ってとっておられますか、三木先生の授業を取っておられる方いますか。えっと、この方です。私、大ファンで、三木先生のところで今、障害とはとか、教育の価値とはということと一緒に勉強させてもらっています。今日は、本年度なぜ鳥大の方に内留に来たのかっていうことも含めて、話をさせていただけたらと思います。

みなさんは、教員志望の方がほとんどだと思っているんですが、希望の職種って、校種って決まっていますか。小学校が希望という方？決まってる？手が挙がらない。中学校？高校？ありがとうございます。人気がないのかと思ってちょっと心配してたんですよ。良かったです。えっと、話が急にしやすくなりました。

小中学校と、高校との違いってどんなところにあるのかって分かりますか。具体的に。年齢がちゃうっていうことももちろんあるんですけど、義務教育と高校の違いってというのは、まず入試っていうものがあります。どんなに入りたくても、いらんっていわれたら入れません。そして、学校に入ってから、義務教育と違って、ある程度求められていることを勉強して修めていかないと、進級とか単位が取れなかったりとか、卒業が出来ないってことがあります。それから、最終的には退学っていうこともあります。自分でやめるっていうこともできるし、言葉は悪いですけど、辞めさせられるっていうこともあります。で、ある程度、求められていることを達成しないと高校に入ることができないっていうことが、みなさんあまりイメージせずに高校に居られたかもしれないんですけど、そういうところが大きく違います。

生活態度とも含めてその学校で求められていることを達成していくということが高校では求められるんですけど、中学生が高校に進学する率ってどれくらいか知っていますか、みなさん。何パーセントくらい？特に鳥取県で、中学生が高校に入る、何パーセントくらい？えっと、今年は確か98.6だったかな。ってことはほぼ100%、100人いたら一人ぐらいは入らない人がいるけど、ほぼ100%の人が、全員が

入ってきます。その中には、もちろん、障害をもっている子もいるし、学力が中学校段階に入らない子ももちろんいます。小学校段階ぐらいで入ってきちゃう子ももちろんいます。そういう子も含めて、高校は義務教育で残った問題だったりとか、家庭の問題とかが全部先送りにされて、もっというと、ねじれてこじれて蓄積された子たちが、それでも高校だけは行っとけて中学校の先生に言われてしょうがなくやってくる。しょうがなくではなくても、こわいなと思ってやってくる。そういう子たちが少なくないんですね。で、でもそういう子たちが「あ、高校に行って良かったな」って思ってもらえるように、小学校や中学校の先生がバトンをつないでこられたのを受け取って、高校というのは、教育を一生懸命しています。

私は中学校のときの体育の先生にあこがれて、それから体育の教員になることが夢になって、ある意味夢を叶えたんですけど、みなさんはね、たぶん、素敵な先生との出会いがあってここにいらっしゃるんじゃないかなんかと思ってるんですよ。教員なんてどいつもこいつも大っ嫌いやっていうような人は多分この場にはいなくて、「ああ、あの先生があるときこう言ってくれたな」とか、「あたしの好きな先生こんな先生だったな」と思い浮かぶ先生がふわふわってありますよね。あると思うんですよ、で、その先生ってどんな方だったのか、今日はみなさんはお一人で来ておられますか。お隣の人はお友達ですか。お友達ではなかったら、自己紹介をさせていただいて、ちょっと自分の素敵だった先生をちょっと共有していただいてもよろしいですかね。ディスタンスがちょっと気になる場所ですけども、ちょっと目をあわせてもらって近所の人と、ぴつと目をあわせてもらって、ぴつ、はい、あいましたね、今、あいました。その方と、お知り合いだったら、あの、「私のなっ」ていうところから、もしも初めてだったら、初めましてから、ちょっとお話してもらえますか。どうぞ。

私のお時間の配分も悪かったんですけど、ちょっとこちらへんで終わりたいと思います。あの、今、話してって言われて、話せて、やめてって言われてやめられるのは、すごい力なんです。みなさん多分現場に立って、現場に行つてここに立つと、逆転現象が起こります。喋れって言うのに喋らないし、喋るなって言うのに喋ります。みなさんとても優秀です。まだ、話し足りないなっていう方が多分いっぱいおられて、私の良い先生の話がまだ全然済んでないんですけどというのがまだあると思うんですよ、なので、ぜひ今日、この後寒くなってきたので、一緒にご飯を食べに行つてもらって、あの先生の話の続きをしてもらったらいいんじゃないかなって思います。

ちょっとふざけて言ってるように聞こえるかもしれないけど、自分の良かった先生の話とか、なんで先生になろうかなって思った原点の話ってけっこう大事で、なんであつた先生になりたかつたんだって思つて思うときに、ああそうだったなっていうことってね、意外と大事だったりするので、ぜひ、ご飯食べに行つてください。

えっと、今お隣のひととね、話題にさせていただいた先生って

ね、たぶん皆さんから見るときつと素晴らしい先生で、力も持っていて、悩みもなさそうで、なんか勇気をもって決断してって感じに見えたと思うんですけど、でもたぶんどんな先生でもうまくいかなかった過去があると思うし、教員をやめたくなった経験ってたぶん1回や2回じゃないと思うんですよ、それでも今まだ教員をしているっていうのは、それ以上に子どもに魅力があるからってということなんです。

私の話をちょっと自己紹介も含めてしたいと思います。あ、ちなみに、あの、すごいかわいらしいというか、簡単に見えるパワーポイントをつくってきまされたけども、本当に支援がいる子たちは高校でもこのくらいのパワーポイントじゃないとついていけません。このくらいです。本当に、本当に苦しい子は。それであの感覚として分かってもらおうかなって思って作ってききました。そう私の話をします。私は一番最初に勤務したのは、進学校と呼ばれるところでした。あの、賢い生徒たちから先生先生っていわれて、「ああ先生になったんやな」って思って嬉しい気持ちで「あ、夢がかなったな」って思って教員をし始めたのを覚えています。ただ、授業がやっぱり準備ができなくて、何をいうかセリフも全部ノートに書いて、こういう雑談をしようとかいうのも雑談もノートに書いたりとかして、もう緊張してたんだと今になって思います。ある程度経験がたつたので、ある程度喋れるようになりましたけど、今でも大事なときはやっぱり原稿をつくらしたりします。で、最初はそんなだったんです。

けど、講師がなくなったときがあって、どうしようかなって思って、スポーツクラブでフロントの係のアルバイトをしたり、博物館で絵の監視のアルバイトをしたりしたんですよ。絵の監視って分かります？座って、しゃべらない、動かない。「触らないで」っていうことはほとんどなくて、私の一番苦手とする喋らない、動かないということをやりました。でもそのときに、目を開けて寝るっていう技術を体得したりとか、2時間妄想し続けるっていう力とかもつけて、よく分からない会議でその力が発揮されてちょっと困ることもあるんですけど、でもそのときに、そんな力をつけながらも、友達たちはみんな結婚して、子どもを産んでたりとか、ばりばり仕事をしていたりなんかして、私は目を開けて寝る技術を体得しとってええんかって思ってすごい不安になったのを覚えています。だけど、不安になりながらも、もう絶対いい先生になるんだって思って、一生懸命夢を膨らませていたときもありました。

で、5回採用試験を受けて、高校の体育はその当時結構厳しかったので5回でも早い方ですかね、で、5回目で受かったんですけど、嘘だっと思われぬように、間違いだったっていわれないように今でも合格通知は持っています。5回目で採用になって、初めて、教育困難校っていうところに赴任しました。で、まあ、そこでの出会い、生徒との出会いっていうのが今のあたしを方向づけたなって、つけてもらったなって思っています。やんちゃで、個性的で、パワフルで、もういっぱいいろんな問題が起こったんですけど、今でも連絡を取ってますし、子どもが生まれたって言ってメール

がきたりとかしていて、いまでも付き合いがあります。で、その中の一人で、あっちゃんっていう子の話をします。

あっちゃんは、入学式の日からなんかこうもういうことなんか聞く気はないよって感じで腕とかまくって、ボタンなんかもうはだけて、なんかこうこんな感じです。入学式の日からこんな感じで立っているの、「おおやるなあ」って思って見てました。でね、入学してからちょっと経ったときに、入学式からちょっと経ったときですよ、普通緊張するじゃないですか、でもね、こういう感じでショートホームルームのときですよ、こういう感じで足の毛を抜きながら、こっちで納豆巻きを食べ始めたんですよ、みなさんだったらどこから注意しますか。私もね、今だったら、納豆巻はないとか、せめてカツオ巻にしるとか、朝やぞとか、そういうくらいの余裕はある、でもそのときの私は初めての担任、そんな子とは会ったこともない、何からやって思って、でもなめられたらあかんって思って、なんかもうぶちぎれまくっていつも怒ってたなって思います。若かったんですね、元気がありました。で、あの、結局、あっちゃんはいろんな問題があって、最終的には学校を辞めちゃうんですけど、いろんな話を私なりにわかんないけど一生懸命しているときに、あっちゃんがこんなこといいました。「先生、私な、やっていいことと悪いことの区別が分からへん」っていうんですよ。「どういう意味？」っていったら、「先生、隣の家の畑のネギを取るのはいけんこと？」って聞くんですよ、本当はナスも取ったんですよ、ナスも取ったんですけど、「いけんこと？」って聞くんですよ、「うん、まあな、泥棒だけえな」っていいました。「そうか」って。じゃあ、「部活中にピアスをするのはいけんこと？」って聞くんですよ、あっちゃんバスケ部だったんで、「まあ、校則だし、部活中危ないけ、ま、いけんわな」って、「え？法律違反？」っていうから、「法律じゃないけど、校則？高校卒業したらいいんじゃない？」「卒業したらいいのか」っていうんですよ、で、次にね、「先生赤いブラジャーをするのはいけんこと？」って聞くんですよ。皆さんだったらなんて答えます？聞かれるかもしれませんよ。「先生赤いブラジャーをするのはいいいですか」って。私はもう分からなくなっ、「好きにしたらいいんちゃう、個人の自由やし」っていったんですよ、そしたら、あっちゃんこうやっていったんです。「お母さんは、全部同じ勢いで怒る」って。どれしても。

あっちゃんね、あっちゃんのご両親は厳格な教員だったんですよ、とっても厳しい学校の先生。お姉さんもお兄さんも有名な大学を出ていて、優秀な、いわゆる優秀な家庭だったんですよ、だから、あっちゃんの苦しさとか不安とか焦りとか、葛藤とかが分からないんです、分からなかった、で、私も分かってあげられなかった、あのとき私は分かってあげられなかったです。だから、あの、あっちゃんもたぶん寂しくって孤独だっただろうなって思います。結局ね、あっちゃんは、妊娠をして学校をやめました。今でもいいお母さんでいてくれたらなっていう風に思っています。

で、あっちゃんから教えてもらったことなんですけど、私

されている方が多かったので、生徒を納得させられる言葉っていうのを持っていないとたぶん苦しいんだろうなって思います。ダメなものはダメっていうのは簡単だけど、ときには有効だけど、基本的には、あなたがそういうんやったら、確かにそうやなって思えるような信頼関係をつくってないと、苦しいと思います。で、そのためには、日々の生活の中に、信頼感というか、「あんたが言うんやったらそうするわ」っていう信頼感がないと苦しいと思います。でなかったら、「お前に言われたくない」ってなります。みなさんは、「あんたには言われたくない」っていうのが、なかったですか。いい先生ばかりだったんですかね、私はありましたよ。教員はやっぱいろんな指示とか禁止とかを言わないといけません。で、なんでだめなのか、なんでこうして欲しいのかっていうことを自分の頭でちゃんと考えて、指導部の先生がこうやっていうからとか、隣のおばちゃんが怒っているからとか、そういうことではなくって、自分の頭でちゃんと考えて、自分の言葉で、こうこうだからこうしてほしいってことが言えるようになってないと、やっぱり苦しいと思います。自分の言葉で話せるってことが大事なんだろうなって思います。生徒はね、本当に大人のことを見えています。特に人間不信に陥っている中学校まで凄く傷ついてきた子は余計見えています。本当は人のことを凄く信用したいんですよ、自分のこと分かって欲しい、でも、こわい。また裏切られて、また傷つけられたらいやだなって思うから、だから、「言ってることはカッコいいこと、いいこと言ってるけど、あの人やってること違うよな」とか、「あの人あんな言うって、ルール破っても怒らへんやん」ってことになる、もうこっちの言うことは全然聞いてくれなくなります。そういうのを見ていて、一貫して指導していかないといけないって思います。だから、逆に、ちゃんと怒ってくれるから好きって言ってくれる子もいます。しかるべきときには叱るし、先生でも間違えたら謝るっていうことが、すごい大事だなって思います。それは、教師と生徒っていうよりも、人と人との関係があるっていうことがすごい大事なんだと思います。人として付き合えるっていうことがすごく大事で、先生と生徒じゃなくても、この人と付き合いたくなって思えるような先生にならないといけないんだろうなって思います。なので、私が失敗した話はよく聞いてくれます。自慢話は全然聞いてくれません。ま、そうですね、先生じゃなくても、自慢話しかしらない友達なんか付き合いたくないじゃないですか。やっぱり失敗も語れるような人になりたいなって思います。

えーっとそれから、生徒の話に耳を傾けてやって欲しいなって思います。たぶんみなさん現場に出たらね、先生聞いてっていわれて、すごい色々しょうもないこといっぱい言ってきますけれども、言ってこなかったとしても、何が言いたいのかなっていう本当の願いみたいなものに耳を傾けてやって欲しいなって思います。最初は文句みたいな感じなんです。「先生あの授業分からへん」みたいな感じをわかって言ってくるんですけど、よく聞いていると、大変なのに自分なりにすごい努力しているとか、なんかいじめられ

ているとか、そういう深刻だったりすることもあります。授業中にふてて寝ていたりしていても、知ってたらね、声のかけ方も変わるんですけど、知らなかったら、「早く起きろ、寝るな」で終わるんです。でも、なんかあったかなって思って、「どしたーなんかあったか」って聞くと、泣き出したりとかしてね、「なんかあったんやなー」って思ったりします。みなさんもそうだったんじゃないかなって思うんですけど、「大人にとってはしょうもないことかもしれないけど、私らにとっては死ぬほどしんどい」ってことなかったですか。彼氏と別れそうとか、好きな女の子に実は彼氏がおるかもしれないへんとか、友達からはぶられている気がしてモヤモヤするとか、お父さんとお母さんがめっちゃ家で喧嘩してて家に帰りたくないとか、なんかいろんなことがあるけど、態度としてはこうなるとい子に対して、起きろというだけでは届かないなって思います。自分もそうだったはずなのに、大人って忘れちゃうんですよ、忘れちゃう、だから、そんなにいいから勉強しろってなるんですけど、大人がちょっと待ってやったりとか、ちょっとほっといてくれたりとか、ちょっとどしたって気にかけてくれるだけで、なんとかやっていけるなっていう気がします。

相談がね、深刻な子ほど、最初はもうすごいしょうもない話をしてくれます。すごいしょうもない相談をしてくれて、そんな自分で考えてみたいな相談をしてくるんですけど、なんか、そういうのでこっちの出方を見ているというか、この人は相談するに値する人なのかっていうのを探っているというか、試されてるなって思います。特になかなか本音を言わないで、よく分からないまま理不尽に怒ったりとか、そんな大丈夫よって決めつけたりすると、お前も今までの大人と一緒にや、やっぱり相談せんで良かったってなっちゃいます。でも、上手く心がつながって、そうっと開けてくれた心の中にあっかかてやわらかくてやさしい心があったりするんですよ。嬉しいですよ、そういうのを見せてくれたときは。

2年くらいかけて1人心を開いたことがありますけど、嬉しかったなっと思います。やっとな開いてくれたんだと思って、やっぱあきらめなくてよかったなっと思うこともあります。そういう子ってね、こっちがピンチのときってすごい分かるみたいで、なんでわかるんやっと思うんですけど、そういう時すごい助けてくれます。仕事がやっぱりしんどい時っていうのはどうしてもあって、もちろん先生同士で助け合うってことはあるんですけど、生徒とか教え子とかに私はすごい助けられたなって思います。結局人と人とのつながりなんだっていうことは生徒から教えてもらったことです。今話したピンチになったことがちょっとあって、そのときの話をします。あるクラスを担当していてね、いろんな問題がどんどん出てしまっていて、結構私はたくましいんですけど、さすがの私もくたびれてしまっていて、精神的にしんどくなってしまっていて、1週間くらい学校を休んだ時があったんですね。いろんな人に話を聞いてくださって電話をして、話をさせてもらいにいたり、いっぱいマッサージに行ったりとかしていっぱいお金も使って、なんとか



自分を助けないとっと思っただけで必死になって自分をなんとか病まないように必死にやっていたときがあります。その時ね、生徒たちがどうしてたかっていうと、喧嘩を始めてたんですよ。西谷が、私が学校に出てこれないのは、誰のせいだっていう、犯人捜しを始めて、みんながけんかを始めてたんですね、で、そのときにね、仲裁に入ってくれてたのがさやかかっていう子なんですけど、さやかがね、「そんな先生はたぶん誰が原因とか探すのは望んでない！」みたいな感じで一生懸命いろんなところに入って仲裁をしてくれていました。電話かけてきて、先生早く学校に出てきてみたいな感じでかけてきてくれました。

さやか、そんなにかわいい子じゃないですよ、本当にいうこと聞かなくて全然、勝手、ほんまに、ほんまに勝手、全然いうこと聞かないんですけど、担任のピンチは分かったみたいなんですよ、で、そうやっていつか来たので、こんな人休んどいたらあかんわって思って、急いで次の日からしんどかったですけど、学校に行きました。で、ちょっと熱出たわ、あんたらのせいで、みたいな感じで普通に出て、先生、しんどかったんじゃないん？みたいな感じでいわれたけど、は、私がそんなになるように見えるか、みたいな。迷惑かけるなぐらいな感じで普通に出ました。そしたら、よかったですね、みんなホットしてましたね、そうなんだみたいな。でねいつも掃除をみんなでべちゃべちゃ喋りながらするんですけど、その日ゴミのないところをずっと掃きながらね、ひろっちっていう室長の子がね、こうやって言ったんですよ。「先生、先生がいない間のこのクラスはミートソースのかかっていないスパゲッティみたいだったし、味噌のといえてない味噌汁みたいでした」って言ったんですよ。すごいこと言うでしょ。で、私はね、「それは食えんな」っていったんですけど、なんか、じわじわ、じわじわくる言葉だなんて思って、なんか、はあそうなんだって思いましたね。だから休まないでくださいって言われました。すごい嬉しかったですけど、すごい背筋がピンって伸びるような、私がかけるソースってこの子らの味が決まるんやって思ったし、どんな子でも受け止める味噌汁にならないといけないなって思いました。私の指導力と寛容性が試されているんだなって思っているんで、今でも大事にここに持っています。

今年、私が鳥大に内留に来た理由は、あの子たちに恥じない自分かどうかっていうことを自分に問うたときに、恥づかしくないっていいきれなかったんですね、俺らの担任しとっていまそれ？って言われているような感じがするときに、あつとあって、学び続けないと、なんか胸を張ってあなたたちの先生ですっていえなくなってきました。今、特性のある子がたくさん増えて、家庭的にも支援が必要な家庭がいっぱいあって、そのときの私ではもう対応できなくなってきました。だから私は今ここにいて勉強しています。あの、みなさんも含めて、生徒だけではないいろんな人との関りで、それが、私の今をつくって支えてくれるなっていう風に思います。きっとみなさんも、この子のために、このクラスのために先生になったんだなって思う瞬間が絶対に来ます。あの、ワクワクしませんか？楽しみで、ね、すると思

います。

えっと、そのために、今できることって何があるだろうって思うんですけど、みなさん勉強ももちろんそうなんですけど、いろんな体験をしてくださいって言われませんか？いろんな体験をしてくださいって、本当にそうだなって思います。いろんな人と出会って欲しいし、同じ大学の同じ人ばかりじゃなくて、いろんな境遇のいろんな人と話してほしいし、語り合っただけでいいし、青春してほしいなって思います。青春ってちょっと恥ずかしいような感じがするじゃないですか、だけど、青春がね、今の青春がこれからのあなたを絶対に支えます。今でもそうですよ、私と一緒に、思っただけとちやうっていう大学生活を送って、寂しかったりとか、思ってたこととちやうと違うっていうことを毎日繰り返す中で、高校のときとか中学校のときにこんなだったな、楽しかったなとか、あのときあの人がこうやって言ってくれたなとか、一緒にいてくれたなとか先生ってこうだったなとかいうことを、昔の青春が今の自分を励ましてくれませんか？隣にいてくれた人の言葉が今の自分をささえてくれたりしませんか。そういう思いがあると思うんですよ。今の青春が、働きだしてからあなたを支えます。絶対支えてくれる。ので、ぜひ、よく食べて、よく寝て、いっぱい遊んで、いっぱい勉強して、しっかりやしてください。で、これからの子どもたちと一緒に青春出来る先生になって欲しいと思います。みなさんと一緒に働ける日を楽しみにしています。今日はありがとうございました。

(石本) ありがとうございます。時間ぴったりでお話していただきました。本当に貴重なお話をしていただきました。またね、お二人のお話を聞いた後でね、私からのコメントをさせていただきたいと思います。続きまして、森川先生の方からお話をさせていただきたいと思います。

## (2) パネリスト講演：

森川真吾 青翔開智中学校・高等学校

(森川) みなさんこんにちは。青翔開智中学校・高等学校の森川と申します。よろしくお願ひします。なんか慌てててですね、表紙をつくるとか、名前も書かずにいきなりこういうこと書いていますけれども、今から私がお話することはですね、先ほどの西谷先生とはずいぶん違う感じになるかもしれません。僕は今拝聴してて、たぶん教員としてみなさんが教壇に立つときに、嫌なことはいっぱいあるんですけど、そういうときに支えになるのはさっきの先生のお話かなと思います。僕もずいぶん忘れてたことをいろいろ思い出させてもらいました。私はね、もっと血が通ってないような話をするかもしれません。

青翔開智中学校・高等学校というのは、国府のマルイさんの前にある学校です。なんの看板もなくてですね、何をやってるかよくわかんないガラス張りの学校で、周りの方からなんと思われているのかすごく僕はいつもドキドキ、あの辺に住んでいるので、近所の方どうなのかなって思っ

す。今年で7年目になるんですかね、7年目になる私立の学校です。鳥取県では、鳥取市はなおさらですけど、私立が少ないんですね、その中で今回初めて私立の学校を呼んでいただいて非常にありがたいんですけど、ここの学校はですね、全国でもあんまりこういう学校はないので、良い意味でも悪い意味でも、今私がお話しすることが、いわゆる世間でいう私立の学校だと思わない方がいいと思います。すごくぶっ飛んでいるというか、おかしなところがいっぱいあるところなので、興味ある方は、入りづらいかもしれませんが、たぶん電話とかしてくれれば、見学とか全然出来ると思います。ふっと来ていただいて、教員になられる方は、ぜひお越しください。この学校はですね、建学の精神とか、教育方針とか書きました。どの学校にもこういうのがあると思うんですけど、こういうのを書いた理由はですね、ここに書いてあることを本気でやろうとしている集団なんですよ、先生方がね。何かあるたびに、みんなここに帰ってきます。これはだからすごく我々にとっては大事な感じかな。すごく変わった先生方が多くてですね、十人十色というか、教育観とか人生観とか価値観が全然違う人たちなのかなって思います。話が、全然、職員会議なんかでも、全然、話が、議論がまとまらないときがあるんですけど、そういうときにここにすっと戻って、ここに照らし合わせて僕たち何をすべきなのかを考えているので、私立の学校に将来お世話になることがあった場合は、ここに帰ることがすごく大事なことかなって思います。今日は、少人数教育ならではのとか、先進的なことをいろいろやっている学校なんですけど、その例や進路の話、そこにまつわる生徒支援の難しさとか問題点とか、そういうのをありのままのことをお話させて頂こうと思います。

少人数なんですよ。中学1年から高校3年まであるんですけど、1学年は2クラス、かつ、1学年は2クラスあわせて41人なので、中1、中2も中3も高1も高2も全部2クラス合わせてその人数。高3とかは、1クラス18名なんです。1クラス18名なんですけど、習熟度別のクラス分けをやっています。国語、英語、英語なんか3クラスに分けるんですけど、そのときは36人を3クラスに分けるんですよ。だから本当に少ないんですよ。今日こだけたくさんの方が来ていらっしゃるって、久しぶりにこんなに人前でしゃべるのですごく怖いんです。

少人数教育の良いところってありますね。1学年2クラスなので、共成、ともに成長するって書いて共成っていうんですけど、やっぱりね、人数が少ないと、その分生徒同士のつながりとか絆っていうのは上手くいくと深まっていきます。で、中学1年生から高校3年生まで6年間あるので、卒業してもものすごく深いつながりが出来るんだろうなと思います。後は生徒の情報をですね、あの子がどうとかどうだとか、この子がどういう問題を抱えているとかっていうのは、教職員のほぼ全員で共有します。毎日の朝礼、夕礼、生徒の些細なことでも、共有していきます。2、3日学校に来ないということがあった場合は、必ず、全教職員で共有をするんですね。それが出来るんですよ、少人数だと。あと、

授業は、グループワーク、少人数だからこそ、毎授業ほぼどの授業もやってるんじゃないですかね、高3生でもやっています。高3生でも、この時期にですね、グループワークをやったり、実験をやったり。去年も高3を見ていて、12月なのに実験をやったりしてて、受験問題でこの実験が出たということがあって、それはそれでよかったんですけど。

それからそうですね、グループワークをするので、協調性というのが自然と育まれますね、それから、グループでやったことを考えたことを発表する生徒とかね、主体性とかリーダーシップとか、プレゼン能力とか、そういうものが一緒に育成させられるかなと。で、教員との距離が近いんですね。私はもう40代半ばなんですけど、ほとんどの先生が20代なんです、20代の先生が圧倒的に多くて、だからってのもあるんですけど、まあ距離が近いですね、タメ語も当たり前です。職員室入るときも、失礼しますとかコンコンとかしないですよ。これが良いのか悪いのかというところ、いろいろな賛否両論があるんですけど、それは、追々後でまた後で、お話が出てくるかもしれません。でも、一応考え方があった上でやらせているというのか、生徒がそれを考えてやればいってという考えがあるので。

相談はやっぱりしてくれますよね。特に若い先生にはもう本当にべったりと相談する子はします。毎朝ですね、教員よりも早く職員室に来て、ある先生と話さない、1日が始まらないとか、もう昼休みなんてどこの学校もそうかもしれませんが、教員はあまり取れませんからね、昼休みはね。今日も私はどん兵衛をすすりながら生徒と一緒に話を、半分どん兵衛を食べられたりするんですよ。いいけど、コロナのことがあるからそれはやめてくれて言っちゃったけど、ま、昼休みは毎回来ますね。生徒で割とあふれています。教員の椅子に座ってます。そういうのは少人数の良いところなんですよ。もっと良い点としては、高校2年生のときから、個人探究活動というのがあって、いわゆる、公立だと、課題研究なんですかね、高校2年生くらいまでに、生徒1人1人が自分の興味関心に合ったテーマを見つけ出して、それを1年間かけて論文に仕上げていくんですね。その授業としてカリキュラムが週2時間ありますけど、放課後使ったりとか長期休暇を使ったりとか、探究の調査に行くならうちはばんばん公欠を出しますので、そういうときに一人の教員が2、3人の生徒の探求を見ていくんですね。で、これは割とですね、生徒にもよるんですけど、ここでかなり生徒との信頼関係が出来ていくかなと思います。それで、高2で個人探究をもってもらった先生が、高3になったときに、進路の担当をしてくれるんですね。進路相談の中身もいろいろです。学部学科とか、どの大学に行くべきか、そもそも大学に行くべきかとか、AO推薦の対策を早ければ高2の3月から始めていきます。そういうのを探究でみてくれる先生と一緒に並走してくれるようなイメージですね。進路の探求に関してはすごく手厚いかなと思います。AOとか推薦の合格者というの、すごく多いですよ。AO推薦ってみなさんはどういう印象を持っていますかね。僕らの若いころは、AO推薦というんですね、なんかあんまり良い

イメージを持たれなかったんですけど、今は情勢は変わって、そんなこともなくなりつつありますね。そういう意味ではまあA0推薦の良い例にはなってるかなと思います。いくつかの教育雑誌にも取り上げてくれたり取材に来たりしています。

この写真にあるようなこんな姿も日常茶飯事です。学校中どこでもこんなことやってます。休み時間、放課後はこんな感じですし、探究の授業の中とか、あるいは、進路探求の演習をしたりするときに、ソファに座って先生とこういう風にやりとりをするというのは日常の風景です。うちの学校の一番の強みは生徒とのディスカッションです。相談を聞くっていうこともそうですけど、理想は、生徒と教員が対等に意見を交換できるっていうのが理想の形なので、そうなれるように、やってるって感じですかね。お手元の資料だと、左下のなんていうか、大学レベルとは書いてありながらも、これは生徒によります。レベルとか内容はかなり低いものもありますけど、だいたい1万字くらいの論文を書いて、高3の夏くらいまでには書ききるっていう感じですね。これを使ってA0推薦に入っていくイメージですね。で、えっと、2ページの右下ですけど、文科省なんかも国公立の定員30%はもうA0推薦で入れるとか、まあ早慶難関私立も半分くらいはもう特別入試で入っている学生ですね。この間立教大も見ましたが、一般でとるのは、全定員の54%くらいなんです。一般の倍率で11倍くらいなんですけどね、A0推薦は割と、まあ、それでもこのあたりの大学だと、5-6倍くらいあるのかな。時代がそういう風になってきています。背景としたら、学力の3要素ですよ。知識・技能と思考力・判断力・表現力と、主体性・多様性を認め合ったり、協働性をつけるというこの考え方を、きちんと点数化して、ちゃんと評価しようというのが、変わっていますね。そういうのに改変していつているのかなって思います。

で、ここからがですね、この少人数教育の課題と対策というところから、リアルな話になってきます。良い学校ですよ、良い学校ですし、理想を求めて、それを具現化しているので、すごい学校だなと思いますけれど、悪い点も当然あります。例えば、良いことをしても悪いことをしてもすぐ面談します。悪いことも、そんな極端な悪いことをしなくてもすぐ面談になっちゃうので、そこをどうするかなんです。ただまあ、悪いことがあった場合は、教員がその情報は共有しているので、教員の方からアプローチしていく。うちの学校はですね、校則がないんですね、校則がないんです。だから、制服はあるんですけど、ある日制服を着てこなくなったとして、あるいは、髪の毛をまっ金髪にしてピアスを開けてきたという場合にどうするかっていうことなんです。学校の根本的な考え方は、そこは個人が生徒が判断しろっていう考え方なんです。けれども、それは、社会常識上だめなんじゃないかという考え方も頷けるし、でも、校則ないじゃん、ないからいいじゃんっていいわれてしまうと、何にもできません。僕は、校則だろっていう武器は使えないですね、なので、実際に今もいますけれど、長い話し合いが始まってきます。その話し合いのやり方っていうのは、それは

もう、本当にその生徒と先生との信頼関係の中であってくださるでしょうね。話し合うことで何かすっきりとしてまたもとに戻るといふこともありますし、あの子は髪の毛を染めていいんだしたら、私も私もピアス開けてっていうのもあります。でも、僕は、そこで声を荒げることはまずないですね。声を荒げることもないし、むしろ会話の一つのきっかけくらいにしています。だけど、絶対、何かその子の中に何かがあるので、そういうときは、その何かにたどり着くまで話すということはしますね。けども、基本的にはですね、悪いところを直すところよりも、良いところを伸ばすという考え方がこの学校にはあります。それが良いか悪いかはケースバイケース。すごく、それこそ、最近よく答えのない、正解のない問題ってありますけど、ここの学校の先生方はみんな毎日それに向き合っています。どれが正しいのかは分からない、私も分かりません。

私ここの学校の4年目なんです。それまでは埼玉の私立学校に勤めていました。そこは、校則もがっちりありますし、ものすごく矯正的な学校だったので、その感覚でいうと、ものすごくしんどかったです。最初は、うちは携帯も生徒も全然使ってもいいし、iPadも全員持ちなさいっていつているし、規制をかけてないの。そういうときにどう風にしてやっていくのか。教員としての自分の心の持ちよう、実際生徒とどうやってアプローチしていくのか、見て見ぬふりをしていくのか。携帯でみんなが探究の調べものばかりをしている訳ではないですよ、ゲームやったり、LINEやったりしています。そんなときにどうするかっていうのは、僕は、校則でとってかかっていうのは使えないので、そこはすごくね、ある意味面白いけど、しんどくなる時かもかもしれません。

それから、生徒の人数は少ないけど教員も少ないから、でも学校運営ってやらなきゃいけないことはたくさんあるので、それをこなしていくっていう意味では、時間がないです。すごく時間がない中で、忙しい中で、生徒との時間、ディスカッションの相談は絶対にしっかり確保していくと。分掌っていうのはうちはないんです。進路指導部とか、生徒支援部とか、教務とか、そういうのはあるんですけど、今、先ほど申し上げた進路とか探究は全教員が関わるので、進路指導団っていうのはないですし、進路指導団がこうやってくれるっていうのはないです。各教員がその生徒の進路実現に向けてどう動くか生徒と教員との関係の中でできてくるっていうことですかね。あと、教員が少ないので、どんどん校外のいろんな人につないでいきます。例えば、探究で、そうですね、演劇の教育的効果ってやってる子もいます。その場合は、鳥の劇場とか、平田オリザさんが今度専門職大学をつくれますけど、そういう関係の方とかに連絡とってみたらっていうふうにして、あるいは、教員から連絡を取ってあげることもありますけど、いったん連絡を取り合うと、自分でちゃんと対応をしたり、っていう風になります。周りの大人たちの力を借りながらやっていくんですね。

先ほどいった距離が近いっていうのは良いことは良いんですけど、生徒は甘えはしますよね、教員に対する。甘えと



いうか、べったりになっちゃう。自立がなかなかできない。いつも横に先生がいなくて勉強できない。それで本当に良いのかなっていうのはあります。そこで、自己調整型学習っていうものを今年から教員で勉強会を開きながらやっています。こういうことをしながら、課題解決の糸口を探っているという感じですかね。あとは、青翔開智っていう学校は、とにかくイベントが大好きで、いろんなことをやるんですけど、疲れる。疲れるというくらい、いろんなイベントをやっているんですね。いろんな人が次から次へとやってきたりして、誰が誰だかよく分からん、校内を歩いているのが生徒なのかよく分からない。うちはカジュアルデイっていう、月に1回生徒が私服で来るんですよね。そうなるとうまく分かりません。すごくイベントが多いんです。それは、人数が少ないので、そのままただずっと学校にいたままだと、息が詰まっちゃうんですね。もし、ある生徒とある生徒がトラブルの場合に、少人数なので、逃げ場がないんですね。クラス分けたとしてもすぐ隣ですし、各学年A組とB組はすごく仲が良いので、いったんこじれると生徒の逃げ場所がなくなるというところから、イベントとか行事を使ってそれをきっかけに関係を直してもらっているものもあります。まあ、イベントが多すぎて、勉強が出来ないとか、疲れるとか、それが逆に人間関係をこじらせる原因になることもあります。今、コロナであんなに多かった青翔開智のイベントが全部なくなっていくんですよ。そうすると生徒たちはもうその落差に学校がつまんない、面白くない、ってなって、学校に足が向かなくなっているという子も今少し始めている。これをどうしようかなって。

あとは先ほどいった、校則もないし、定期考査も去年から全部やめてます。その代わりに、単元テストを導入しています。また、部活の強制をしません、放課後の補習・講習は一切ないし、18時には絶対みんな帰るようになってます。これは全部ですね、そういうことが必要なら自分で考えて自分で必要なものを身につけていってほしいっていう我々の考え方なんです。檻をとっばらってみた。檻をとっばらって、やっと自由だってパーって羽ばたく子もいれば、檻がないと不安で不安でしょうがなくなる子もいます。そんなただの放任じゃないとか、実際これって学力どうなってるのっていう保護者さんの心配もあります。定期テストは中間とか期末とか期間が決まっているし、終わったらわかってっちゃう。単元テストというのは、ある単元が終わるごとにテストをするので、延々と続くんです。テストが、それで疲弊があって、それで今高校生がすごく疲れ果てていますね。それをさてどうしようかっていうのが我々の課題です。けれども先ほどいいましたけども、自己調整型学習っていうものの考え方があって、これは後でちょっと時間があたらお見せしますけども、校則もないし、テストもないし、さてじゃあ自分はどうやって勉強したらいいんですかっていうときに、この自己調整型学習っていう考えた方があるよっていうことを紹介して、ある程度それが軌道に乗るまで一緒にやっていきます。で、それで、先ほどの校則がないとか、それが一体どういうことなのかを考えてもらうことを

目的にしています。自分が進路をデザインしていくようなことを決めてるんですね。あとは、後は校則もないっていうときに、じゃあ、道徳の授業をしっかりと見直して、道徳の中で生徒に考えてもらおう、道徳の授業を通して、生徒に考えてもらおうっていう考え方を今持っています。それから、生徒間の話し合いの場をこれからもっとつくらないといけないなって。もともとはですね、校則はあったみたいなんです。それは、生徒が作った校則なんです。でもその校則を撤廃したのも生徒なんです。その自治権っていうのは、教員は入らない。まあ、ディスカッションはしますけど、決定権は入らないという感じなんです。そうやってさんざん話し合っていて、ディスカッションした結果、校則はなくなったんです。でも、なくなったら、もう話す機会が減ったらしくて、今こ2、3年生徒は話し合っていないので、だったら、校則がない意味とかを考える場をもう一度提供しようっていうのをやっています。あと、保護者さんにも、丁寧な情報提供をしないと、本当に大丈夫なの青翔開智って思ってる保護者さんも多いと思います。

で、あまりにもなんにもないと放任になってしまいますので、我々が今ちょっと考えているのは2つの軸ですね。まず、学習面とか進路とかいう面では、縦軸の自己調整型学習っていうものを導入して、生徒たちが、自分のために何を勉強、どう勉強していけばよいかっていうのを、教員や仲間や、その他リソースと交渉して、交渉しつつ自己決定していくコントロール権を生徒に与えていくことがこの考え方です。今、これは始まったばかりなのでまだ分かりませんが、そのやり方っていうのはですね、我々がやっている探究活動っていうのと、全く同じなんです。だから、自分の進路とか自分の学力課題を探究プロセスを使ってやっていくような感じで考えています。もう一つは、下の概念ですね。PBISっていうのがあるんですね。ポジティブな行動に我々教員はときに介入して、ときにサポートしていく。生徒たちが失敗してもいいように、教室空間とか、ここは安心して失敗できる場所なんだよっていうことを知ってもらうための環境づくりに今、力を注いで励んでいるんですね。この2つが上手くいくといいなと考えています。あとは、お時間ももう来ていますので、先進的な教育をやっていることを紹介させてもらおうと思います。中1から高3まで、教科の学習と、別に探究っていう枠があるんですが、これからは教科の探求を融合させていくということで、各教科内で探究的なスキルを、様々なスキルを身につけて、いろんな教科学習を借りてやっています。あとはコンピテンシーっていうんですかね、人間性みたいなものをちゃんとルーブリックをつくって、カリキュラムの中に入れて、コンピテンシーを育てるっていうこともやっています。育てるべき生徒像と例をつくって、かなり細かいルーブリックなんですけど、その生徒像をしっかりとって、普通の生徒との関りをやるということですね。ICTは、先ほどいったような感じで、学校生活とか、生徒と教員がスプレッドシートを使っているようなディスカッションをしたりとか、生徒が書く論文を共同編集したりとかはやっています。あとは、教材



にAIを入れてみたり、画像認識技術をさせたりプログラミングをさせたりとかっていうのもやってはいます。あとはまあ、職場体験ですね。これもちょっと特徴的で、例えばスターバックスとか、去年かな、去年は鳥取の大丸さんの課題を解決しようとかっていうですね、生徒たちが何日間も大丸にはってお客さんの行動を見てここがだめですよって大丸の社長とかに提言するっていうことをやってしています。後はごろごろと横文字のことが書いてありますが、もし、深く知りたい方はググってくればいろいろ出てくると思います。ま、そんなようなところですね、なんやかんやの試行錯誤をしているということですかね。

えっと、みなさんへっていうことで、先ほどもお話がありましたけど、いろんな人に会ってください。旅・本・人っていう、これは立命館アジア太平洋大学の学長さんもよくおっしゃっていることなんですけど、コロナ禍なので、なんともいえませんが、旅をして、本を読んで人に会おうってことは、いつのどの職業についても大事だと思ってます。後はですね、明確な理想を持って最後書きましたけど、私ね、教育ぐらいだと思ってるんですね、理想を本気で追いかけても良いものは、社会人だと理想と現実のギャップというものはずっとあるんですけど、でもそこで諦めるんじゃないで、自分はこんなことをしたいんだ、こういう生徒を育てたいんだという理想だけはしっかりと持って欲しいんですね。で、その理想があると、自分が私立の学校に行こうか、公立の学校に行こうか、そのところはぶれないんです。その自分の理想だけはぶれずにその理想を具現化していくために精一杯行動すると、なんか生徒が答えてくれますので、そこをちょっと意識して、この4年間の中で、教育者としての理想というのを恥ずかしながら、どんといえるようにしてもらえようようにしてもらえたらいいなと思います。すみません、一方的に話して終わりますけども、以上になります。

### (3) 質疑応答

(石本) ありがとうございます。お二人にお話をいただきました。

今日お話を聞いて、本当に今日僕はお二人の先生に話していただいて、良い組み合わせだったなと、本当に良いお話を聞いたなと思っています。みなさんおそらく、高校の免許を取るって手を挙げた方がすごく多かったと思うんですけど、たぶん自分がイメージした高校と違ったんじゃないかなと思うんですよ、両方とも。特に農学部と工学部の方は教科を教えるイメージが強いと思うので、余計にイメージが違ったのかもしれませんが。高校ってそれだけ幅があるんですよ、本当に。小中学校は、小中学校は基本的に地域の子がくるので、もちろん地域カラーは出ますけど、地域カラーが出て多少の違いはありますが、ここまでの幅は出ないんですよ。基本的にはほしい、同じような感じにはなりません。でもやっぱり高校っていうのは選抜があるので、これだけ幅が出て来るっていうのがあるんですよ。

今日お話いただいた2つの高校に行くような子ども、こ

の場合にはね、むしろ小中学校では合わないっていうパターンがよくあるんですよ。というのも、最初に西谷先生にお話ししていただいたようにね、なかなか家庭背景が大変だったりとか、なかなか家庭との関係がよくなかったりとか、いろんな背景がある子っていうのはしんどくなりますし、一方で、青翔開智の生徒のように枠を超えたことをしたいという子も今の小中学校だとしんどくなる子がいるんですよ。高校になると、ぴったり合えばですけど、うまいことサポートしてもらったりとか、伸ばしてもらったりとかしてもらえる子も出てくるかなっていう風に思います。

今日の話はね、本当に、ずっと覚えておいてもらいたいと思います。特に1年生の方は特にそうなんですけど、まだ教職課程が始まったばかりだと思うんですけど、この後、生徒指導とか教科の学習とかで、僕であれば生徒指導・教育相談っていう授業で話をしますけど、大学の授業で話をすることは、結構理論とか基本的な話をしないとイケないので、もちろん現場での話は多少しますけど、そうなるってね、学校での大変さの話が多くなっちゃうんですよ、どうしても。そうなるって、1年生のときは教員免許を取ろうと思ったけど、どうも授業を受けたりとか、教育実習行ったら、やっぱり私教員無理だわとか、教員やめようかなと思う人がかなりいます。でも、大学で話すのはそれはそれで一つの現実なんですけど、でもねやっぱり最初に西谷先生の話にあったようなすごい素晴らしさもある訳ですよ。森川先生の方からも、生徒の相談っていうのがありましたけど、つながりがあつたら教員ならではの醍醐味が出てくるかなって思います。もちろん最初にお話ししていただいたように、家庭背景が大変だったり、いろんな特性を持ったりとかっていう子は小中学生にもいっぱいいるので、小中学校を目指す人ももちろん会おうと思いますし、西谷先生の話にあったんですけど、小学校のときに適切にケアされてなかったことが中学校で本当に積み上がりますし、中学校の物が高校に積みあがることもあるので、よりね、高校のときは大変になって来るかなって思います。

でね、校則がないことでね、それが校則だろっていうのが使いえない話があったんですけど、これって本当はね、すごく教育の本質ですよ。本当は、校則はあるからといって、それが校則だろっていうのなんて、本当に何もいってないに同然ですよ。そんなの何も説明してないも同然ですよ。だから、最初の西谷先生の話でも、校則があっても、校則だろっていう話をするわけではないですし、それは通用しないですよ。校則がある学校だとしても。そうじゃなくて、なんでだめなのかを一緒に考えていかないといけないし、なんでそれが必要なのかを考えていかないといけないっていうのは、本当に教育の本質だと思うので、そういう意味も含めて覚えておいて欲しいなというところがあります。

小中を目指す方は今日ちょっと少ないと思うんですけど、小中を目指す方も、今はね、公立の小中学校はこんな感じじゃないですけど、でもゆくゆくはこうなっていくと思います。今流れとしてはそうなるんですよ。今までのやり方は通用しないので、求められる人材っていう意味でも、生徒の

多様性に対して対応しないといけないという意味でも、これまでのやり方は通用しないので、今の話を覚えておいてもらいたいというのは、大学の教職課程の間、授業を聞いて教職やめようかなって思わないようにも覚えといてもらいたいし、教員になった後も、覚えておいていただくと、高校の教員じゃなくても役に立つんじゃないかなって感じがしますね。

最後に一つだけお話の中でPBISっていう言葉が出てきましたが、もちろん1年生の方はほとんど聞いたことがないと思うんですけど、PBSという言葉もあります。心理学の行動理論、応用行動分析というのに基づいた生徒支援っていうことで、根拠に基づいた介入っていう感じです。アメリカ中心にすごくやっていて、今日本でもやっているところがあったりします。校則だからではなくて、根拠に基づいてどう指導していくかっていうところも徐々にどんどん入っていくんじゃないかなって思います。

ではまだ時間は残ってるのでね、今日は本当に貴重な機会だから、みなさんから質問があればぜひ聞いてもらいたいと思います。質問がある方は挙手していただけたらなと思います。なんでもよいですよ、すごくしょうもない話をしていただいても良いですし。基本的な確認でもよいですけど、どなたかご質問ないですか。いませんか。

では、もう一つ最後にね、どちらの先生方も言ってもらっちゃいましたが、大学生の間にね、いろんな人と出会ったりとか体験をしておくっていうことに関してです。感覚として大事っていうのも分かると思うんですけど、大学生って基本的に青年期です。青年期は、自分のアイデンティティを確立するっていうような発達の課題がある時期です。そのためには、人と出会うっていうのは、リアルな出会いじゃなくても、本の中の人でもよいんですよ別に。いいんですけど、そうやって出会うって対話するっていうことは必須条件なので、やっぱり今コロナの状況でそれをおすすめしにくかったり、出来にくかったりと思うんですけど、可能な限りね、本は出来ると思いますし、人と出会うって話をしていくというのはね、今日の話にもありましたけど、しておいていただいたらなって思います。

片山先生からなんかご質問とかありますか。

(片山) 今日はどうもありがとうございます。それぞれにお勤めの学校での経験であったりとか、状況であったりとか、それからそれぞれに何を大事にされてこられたのかとかよく分かって、学生さんも注意深く聞きながら、ご自身の高校時代とか振り返っている人もあったんじゃないかなって思います。今日お越しの2人の先生方に、たくさんのいろんな思いはお持ちだと思うんですけど、もしも1つ、高校生3年間で前に、お二方が教育として3年間の教育として一番大切に育てたいと考えていらっしゃることを挙げていた

だけたらなと思いますのでよろしくをお願いします。

学校がっていうことになると、組織としてっていうことで、今お話をいただいたと思うんですけど、先生個人として、高校生を育てていらっしゃるなかで、個人としてお考えのね、一番大切にいらっしゃることを教えていただきたい。

(森川) いろんなことが出来る子っていうのは素晴らしいですけど、教育現場にいる人間にとっては、その人達がほとんど自分主体でやっていけばいいと思います。いろんな問題を抱えていて、なかなか自分の能力がないと思っていたり、自分には可能性がないんだと思っている子が、教員の引き出し方によって、能力とか楽しさとかを気づくことがあるんですね。その瞬間っていうのはさっと駆け出す感があるって、それがうまくいくと、3年間で生徒が化けますね、そういう姿を後ろで見ながら生徒が卒業していくのが一番やって楽しい。生徒もその生徒の保護者も気づいていかなかったある能力に生徒が気づく瞬間に立ち会えるっていうのは、個人的には一番なんかそういう瞬間を常に見ていたいなって思います。

(西谷) もう言い尽くしてしまったんですけど。私は本当に苦しい子たちの専門なので、話の中でも出したんですけど、大人も捨てたもんじゃねえなって思わせて卒業させてやりたいなって思っています。どいつもこいつも大嫌いだっていう人は私の周りにはたくさんいて、初対面ですよねみたいな感じなのに、私先生のこと嫌いですっていう子も結構いたりするので、なんで嫌われたのかよく分かんないけど、「宣言だ」みたいな子も結構いる中で、でも3年間で全員嫌いなわけでもないというような感じで、一生懸命関わっていくと、別に大人が全員嫌いな訳ではないとか、人間がみんな嫌いなわけではないという気づきが来ると、社会に出てからあきらめず生きていけるのかなって思ったりします。

(石本) ありがとうございます。本当にいま言っていたようなことって、小中学校のうちにカバーしといてもらえなかったところもあったりするんですけど、高校ってある意味最後のチャンスなんですよ。大学に進学しない子もすごく多いですし、大学って進学したらそこまでのサポートってしてもらえないですからね。そういう意味では高校でそうやって人間に対する信頼感を取り戻すっていう本当に最後のチャンスを担っていただいているところかなっていう風には思いますね。

では、もうお時間になりますので、最後にお二人の先生方に拍手をしてお終いにしたいと思いますね。二人の先生方、ありがとうございました。

## テーマ2 「義務教育学校の実際」

(石本)「第二回のつなぐパネル」ということで始めたいと思います。今日は、義務教育学校の先生方からお話をお聞きしたいと思います。「義務教育学校」、多分ここまででもしかしたら授業で聞いているかな?と思いつつ、もしかしたら聞いたことの無い方もいらっしゃるかもしれませんが、要するに小学校中学校の義務教育段階が一つになった学校というふうには認識していただけたらいいと思います。まあ後で詳しくお話頂けるとと思います。

ももとは、行政的な意味としては、結構コスト削減的な意味もありますけども、もっと積極的な意味としては、小・中が一緒になることでいろんな連携ができたりだとか、独自の新しい試みができたりとかいう点で、今までの小・中学校とは違った取り組みをされていることもすごくいろいろありますので、そういったお話も聞けたらなと思います。

鳥取は特に、義務教育学校はどんどん増えていますし、他府県でも義務教育学校が増えているところもありますので、教員を目指されている皆さんの中にも実際に教員になった時に義務教育学校に着任することもあるかもしれませんので、そういったことも意識しつつ、聞いていただけたらと思います。

最後に、質疑の時間も取りたいと思いますので、その時にこんなこと聞きたいなということも思いながら聞いていただけたらなと思います。そのためには、疑問に思った時にメモしておいていただけたらと思います。では、片山先生の方から先生方の紹介を先に頂きたいと思います。

(片山) お二方の講師の先生をご紹介させていただきます。では皆さんから向かって左にいらっしゃいますのが、鳥取市立福部未来学園の林田卓也先生です。よろしくお祈いします。

(林田) よろしくお祈いします。

(片山) 引き続きましてお隣にいらっしゃるのが、義務教育学校となつてまだ間もないという、とつてもフレッシュな鳥取市立江山学園からお越しいただきました、稲垣彰浩先生です。よろしくお祈いいたします。

(稲垣) よろしくお祈いします。

(片山) それではこの順番でお話しいたしますのでよろしくお祈いします。

(1) パネリスト講演:

林田卓也 鳥取市立福部未来学園

(林田) みなさんこんにちは。鳥取市立福部未来学園から来ました、林田と申します。担当は、教務主任をしております。

実は、私は昨年度までですね、同じ義務教育学校の鳥取市立湖南学園に在籍しておりました。片山先生とは、当時、校長先生でいらっしゃったのですが、4年間一緒に仕事をさせていただいてお祈います。こんな縁もあつて、今日は来させていただくことになりました。みなさんからのご質問も大変期待しておりますので、どうぞ自由に質問してみてください。

それではですね、今日はですね、「義務教育学校の実際」ということですので。私もすでに小中一貫校の経験が9年目になりますので、そんなことを織り交ぜながらお話をさせていただこうと思います。

それではですね、「これまでの学校」ということをちょっと振り返つてみたいと思います。実は平成27年度までは、小学校、中学校、それから小中一貫校と、この3つの校種でした。皆さんちょっと手を挙げていただけたらありがたいのですが、小学校、中学校のパターンの方いらっしゃいますか?普通ですね。はいほとんど。今度は、義務教育学校じゃなくて、小中一貫校でお過ごしになられた方いらっしゃいますか?あつ、いらっしゃいませんか。

鳥取は割とですね、小中一貫校、この小さな小規模の小中一貫校があつたんですね。それが、平成28年度にですね、義務教育学校ができました。これは、国の方が義務教育学校の制度を作つたということになるんですけども、鳥取県では実は平成30年度私の務めている福部未来学園、湖南学園、それから、鹿野学園。それから今年からですね、江山学園と4校が義務教育学校になっております。

では、「義務教育学校とは」ということなんですが、ちょっと難しい文章ですが読んでみたいと思います。

『「義務教育学校」は、一人の校長の下、一つの教職員に組織が置かれ、義務教育9年間の学校教育目標を設定し、9年間の系統性を確保した教育課程を編成・実施する学校のこと』をいいます。『心身の発達に応じて、義務教育として行われる普通教育を基礎的なものから一貫して施すことが学校の目的とされる。』

難しいですね。これだけでは、何のことかよくわかりません。まず、「学校教育目標」って分かるでしょうか?学校教育目標っていうのは、すべての教育活動の基本となる目標になりますので、校長先生が変わられるたびに変わるものです。

それから、「教育課程」というのは、簡単に言うと教育の計画になりますね。学校教育では、学習指導要領に基づいて教育課程が作られております。ですので、小学校から高校まで6・3・3の年次を前提にどの学年でどのようなことを学ぶのかそれを系統立てて計画されています。時間割とか、年間の計画等が該当いたします。

ではですね、具体的に次は、「小中一貫校」。平成27年度までの小中一貫校と義務教育学校を比較してみたいと思います。私も小中一貫校に勤めておりましたので、そのことと、今、勤めている義務教育学校の違い。実は大きく肌で感じておりますので、その辺も後の方で、また後ほど触れたいと思



います。

まず、修業年限ですけれども、小中一貫校では、小学校が6年、中学校が3年となっております。以前勤めていた学校ではですね、湖南学園だったんですけど、「湖南学園小学校」、「湖南学園中学校」というのが正式名称でした。通称「湖南学園」として、一貫校として扱うのですが、別々の学校が一つの組織の中にあっただけですね。ところが義務教育学校になりますと、小学校中学校はつきません。「鳥取市立湖南学園」、「鳥取市立福部未来学園」という形になりますので、そこが大きな違いですね。ちなみに義務教育学校は、入学式と卒業式は一回だけです。小学校1年生で入学して、9年生で卒業するという形です。

それから教育課程につきましては、小学校中学校が小中一貫校になりますと、それぞれ別々の目標を設定し、教育課程を編成いたします。一体化する場合もあるんですが基本的には別々という形です。義務教育学校はこれがですね、非常に大きく変わるところです。ちょっと分かりにくいかもしれませんがお聞きください。9年間の一貫の中ですと、教育目標を設定します。9年間の系統性を確保した教育課程を編成いたします。

具体的には、どんなメリットがあるかということなんですけれども。「特例」というのがありまして、例えばこんなことができます。新教科を作ることができる。「新教科」例えば国語とか算数とか理科がありますよね。それに加えて新しい教科を作ることができるんですね。割と簡単。簡単というわけではないんですけど、設置者の判断により可能ということになります。本校もあとで紹介しますが、「みらい」という教科を作っております。

それから続きましてですね、指導事項の学年や学校段階の入れ替えができます。具体的に話しますと、例えば中学1年生の内容を小学6年生でできる。小中をまたいで教えることができるんですね。あるいは、小中をまたがなくても、学年をまたいで、例えば中学校3年生の内容を中学校2年で教えることができます。そういった前倒し、そんなことも、この学校ができる一つの可能性であるということをご理解ください。ただ、運営はなかなか難しいのが現状です。

では、「企画の2」に行きたいと思います。組織はというと、小中一貫校の時代は実は、校長先生が2人、小学校中学校それぞれ別々の学校ですので、いるというのが基本です。鳥取の場合はそうではなく、一人しかいらっしゃいませんでしたけれども、別々な学校というパターンが全国的にはあります。

義務教育学校は、校長先生は一人だけです。当然、一つの学校ですので一人ということになります。ただし、副校長先生とか教頭先生が配置されますので、割と管理職の人がたくさんいらっしゃるのかなあと感じます。

続きまして免許ですけれども、免許は、小中一貫校の場合は、小学校の先生は小学校の免許、中学校の先生は中学校の免許があれば務められますね。ただし、小学校の免許しかない先生が中学校の授業を行うことはできないんですよ。免許外申請が必要になりますけれども、まあなかなか現実

的ではないです。

それから義務教育学校は原則、両方の免許を持っている人が来て下さいよということになっています。ただ現実には、そんなに上手いかわなくて、小学校だけの免許しかない先生もいらっしゃいますし、中学校の免許だけしかない先生もいらっしゃいます。

私はたまたま両方持っておりましたので、どちらの授業にも出ております。基本は、中学校の「技術」という教科を担当しているんですけども、理科の免許もあったり小学校の免許もあったりするのでいろんな授業に顔を出しています。そんな状況です。

あとですね、「例」というところをご覧ください。鳥取県の例でいきますと、小中一貫校、今もやってらっしゃる学校が、若桜町の若桜学園小学校、若桜学園中学校。これが小中一貫校です。それから義務教育学校になっているのが先ほど紹介した、湖南学園、福部未来学園、鹿野学園、江山学園この4校ということになります。

では、文部科学省が実は平成28年に手引きを出してございまして、それをちょっと読んでみますが、次のようなことがメリットとして挙げてありましたのでご案内いたします。

「中一ギャップ」、「小中ギャップ」。聞いたことがあるでしょうか。皆さんもお感じになったことあるでしょうか。数年前ですよ。いわゆる小学生が中学生になるときに、部活が始まる、勉強時間が50分になる、あとはなんでしょう。制服になるとか。さまざまないろんなハードルがぐっと上がる。それに合わせて、ちょっと不適応を起こしたりだとか、しんどくなったりだとか。というところが出てくる現状を最近耳にすることが多いと思います。それが、なだらかな同じ学校ですので、比較的そういったギャップを感じる数が少ないということが言われています。

2つ目ですけれども、小中の交流がこれまで以上に促進されるということですね。小学校と中学校で連携を取っているのはどこの地域でもたいがいやってらっしゃいますけれども、ほぼ同じ校舎で過ごすパターンであれば、毎日が交流みたいなものですね。昼休憩は、小学生と中学生が毎日一緒に遊んでいるような姿がほんとに普通に展開されているということですよ。この辺の状況を見るともうそれは、日常ということです。

それから3つ目は、自由なカリキュラムが編成できる。さきほども言いましたけれども特設教科と昔は言っていましたけれども新しい教科をつくることができますので、学校の実情にあったカリキュラムが編成ができるということですね。

それから「学力の向上が期待できる」。これ何で学力の向上につながるのかと疑問に思われる方もいらっしゃると思います。実はいろんな仕掛けがありまして、「教科担任制」聞いたことありますか。中学校は教科担任制が基本ですよ。数学は数学の先生。国語は国語の先生。音楽は音楽の先生。そういった支援方法が義務教育学校では持ってきてやすいですよ。ということで例えば美術の先生が図工を教える。中学の音楽の先生が小学生の、小学生っていうか前期

課程の音楽を教える。そういう形で割と自由な教科担任制が導入し易いので、そういった面もあって児童・生徒の学力の向上・教員の専門性が発揮しやすいということが言われています。

あとは5番目、「公務の効率化や質の向上につながる」。先ほどちらっとご紹介もありましたけれども、「公務の効率化」分かるでしょうか。2つの学校だったら2人の校長先生、事務の先生、養護の先生。そういった形で、2人分の雇用が必要だったのが1人になってしまうということですね。こういうところが非常にコストダウンにつながるということがあると思います。

それから「質の向上につながる」。これはどういうことでしょうか。例えば、部活動は、小さい学校であると中学校の先生が大変少ないですが、小学校籍の先生にも部活動を持ってもらうことができます。そんなこともあって、子どもたちにとって教員の専門性が教育課程外でも更に発揮されやすいということですね。

本校でも小学校籍の先生が積極的に駅伝指導などをされています。それは大変ありがたいなと思っております。私は中学校籍ですけれども、前任校では小学校の水泳が専門だったので、練習とかに出たこともありますので、そういった良さがあるのが義務教育学校だということですね。

最後。「PTA 組織の一本化」ということもありますね。これも同じ日に懇談ができますし、参観日も同じ日ですし、非常にまあ効率が良いということですね。二日間に分けることがなく、休みも取りやすいということで大変喜ばれております。

では、文部科学省が示します、デメリットです。当然メリットもあればデメリットもあるわけですが、ちょっとまた確認をしたいと思います。

まず一つ目ですけれども、これも分かると思いますよね。9年間同じ学校。それから入れ替えがないということですね。特に小規模校であったらクラス替えもありません。9年間メンバーがほとんど変わらない。転入転出だけしかないということですね。ですので、固定化されてしまって、関係が崩れるとしんどくなってしまうと。子どもたちは上手くその辺は、やっているのが実情です。徹底的な決裂にはならないように、上手に立ち回っているという感じは感じております。

それから2つ目ですが、学年団体の柔軟な設定により、小学校高学年におけるリーダー性の育成が阻害される。これもお分かりでしょうか。小学校6年生といたら、まあ小学校のリーダーと位置づけられるんですけども、残念ながら中学生がいてしまうということですね、ちょっと出番が無いということですね。6年生問題というか、6年生の活躍の場をというのは常々言われております。

それから3つ目はですね、転出入する児童生徒への対応。例えば先ほど申しました、授業内容の前倒し。先の学年の勉強をさせるなんてことがあった場合がありますけれども、もし転入してきてしまったらその子にとっては未習なわけですので非常に難しくなる。例えば、具体的に言いますと、一

貫校の高等部に一般中学校から中途入学した場合みたいな感じですかね。もうすでに「あの同じ同級生は先のことを勉強しているのに私はまだ勉強していない。」そんな感じになってしまうということですね。これがちょっと問題かなと思います。

4つ目ですけれども、小中の両方の免許が必要になるということですね。これまた大きな問題と言えるかもしれません。両方免許を取るってことは大変かと思えますけれども持っている武器になるか、あるいは、足かせになるかちょっとわかりませんが義務教育学校にとっては、すごくありがたい先生になると思います。

さて最後ですけれども、校長先生の職務が過重にならないように配慮する。いわゆる校長先生は大変お忙しいですね。会議等もたくさんありますし、出張も多いです。小学校・中学校両方の校長先生の会議に出席していただく必要がないということ、非常に多忙を極めていらっしゃると思いますので、そういったところも正直なところ難しいところでありまして。それに加え、修学旅行とか行事も多いですね。1つの学校だったら1回なのに、たくさんありますから。6年生の県外研修、9年生の修学旅行、そういった形でたくさんの旅行的行事にも出ていかれるということになります。

ではここですね、本校、福部未来学園についてちょっと紹介しながら実践についてお話ししたいと思います。まず鳥取市福部町ですけれどもご存知でしょうか。大変小さな町になるんですけども鳥取市の北東端の郊外に位置する地域です。平成の大合併を経て、鳥取市と統合しました。旧は福部村という村でした。そうは言いながらもですね、全国的に有名な観光資源の鳥取砂丘、砂の美術館、あるいはジオパークを有しております。砂丘を利用した砂丘ラッキョウがブランドの作物です。ラッキョウの花は市の花に指定されています。他にも梨づくりも大変盛んになっております。本校もラッキョウ、梨、それぞれの生産の体験もさせていただいております。

福部未来学園がどのように生まれたのかというあゆみを紹介いたします。まずですね、地域の方から声が上がったということが大きな特徴です。平成25年ですから、そんな昔ではありません。「福部の教育を考える会」という会から立ち上がって小中一貫校の事業が定まったようです。その後、設置が決まり、校名、学園章、学園歌等が決まっていきます。

そして平成28年に先ほど申しました、小中一貫校として開講いたしますが、本校の特徴としましては、なんと幼稚園も有しているということですね。実は幼稚園の1年間を含めると、10年間の教育ということになります。義務教育学校としては、前期課程の小学校の期間を小学校といいますが、小1からですけれども、幼稚園も一緒に学校の中にあり、年長さんが一緒に生活しています。

そして2年後の平成30年に、一昨年に、福部未来学園幼稚園と義務教育学校が開校いたしました。開校今年で3年目ということですね。そして、またのちほど触れますが、学園憲章が昨年の11月に制定されています。ちょうど1年前に制定されました。これが本校の歩みです。

では、続いてさきほど文部科学省の資料を出しましたけれども、義務教育学校の視点で見る福部未来学園について少しお話をしたいと思います。実際のところはどうかというお話です。

1つ目ですけれども、入園入学と卒園卒業。ブロック修了について説明します。まず、幼稚園がありますので、幼稚園については入園式と卒園式があります。一年間だけですが入園式と卒園式を行います。

それから小学校1年生になると入学式があります。前期課程の1年生で入学式で、9年生で卒業式。6年生の卒業式はありません。卒業証書もありません。すごくびっくりされると思うのですが、6年生はないんですね、全く。正し、本校から他の学校に転出する場合には卒業に関して、証明する証書は出せませんが、卒業証書はないということになります。入学式と卒業式は1回ずつということですから。9年間で1回ずつ。

代わりにと言ってはなんですけれども、今、色分けしてまされども、それぞれブロックが分かれておりまして、ブロックの終わりにブロック修了式というのがあります。割と厳かな式で、卒業式まではないのですが、それに準ずる式として位置づけております。

初等ブロック。幼稚園から2年生までの修了時点でまずブロック修了式。ちゃんと証書をもらうんですね。それから中等ブロックは、3・4・5年生です。5年生修了時にもらいます。ここまでが自由服ですね。高等ブロック、6年生からが制服になりますので、制服生活が始まったら4年間過ぎますが9年生、こちらには修了式はありません。修了式の代わりに卒業式ということ。これが本校のブロックの特徴です。

それから続きまして、「学園憲章」と「学校教育目標」。「学園憲章って何だ」と思われると思いますが、実は簡単に言いますと校訓のようなものです。校訓っていうと何かあの石碑に掘ってあってですね、学校の入口にあたりするもので、もうずっと変わらないものですよ。だいたいね。「友愛」とかね、ありますよね。そのものがですね、本校では学園憲章といいます。今ちょっとデザインされた4つの学園の憲章が入っておりますけれどもね。

これはですね。校訓を定めるにあたっては、地域の方からですね、自分たち生徒というか、学園生が自分たちで学校を創っていくと。そういった思いを持って制定してほしいということで始まったようです。ですので、数年間かけてこれを作りました。昨年完成したということです。11月2日制定となっております。5年間に1回見直すということにしておりますので、今1年終わったところです。あと4年間使ってまた検討していくということです。

それからその下に出ているのが、「学園教育目標」。最初に説明した学校教育目標に当たるものです。校長先生が作られるものです。本校の校長、竹内通恵が作ったものです。

「志を持ち、自分で考え、行動する子どもの育成」というのが本年度の学園教育目標になります。学園・・・の上

にあるということがポイントですね。まあ校訓に値するものですから当然と言えば当然かもしれません。

続きまして、教育課程について説明します。教育課程についてもお手元の資料の中にも入っておりますので。あとでゆっくりご覧ください。

いわゆる、授業時数とか指導体制について説明します。いわゆるTTと書いてあるのはチームティーチング。2人体制とか3人体制とする授業です。それから、緑の塗りつぶしが教科担任制。専門の先生ということです。これだけ多くの教科に入っております。中学校は当然ですけれども6年生はほとんど教科担任制ですね。5年生、4年生、3年生も割と入っている方だと思います。担任の先生ではなくても、違う先生が授業するという、そんな学校です。なんと、1年生、2年生もそうですね。音楽については専門の先生が教えてらっしゃいます。他にも書写に入ってる部分があります。

あとは、「みらい」という教科についてお話をしたいと思います。「特別の教科等」という内容になるのですが、この「みらい」という教科はですね、皆さんも勉強されたと思うのですが、「総合的な学習」と、いわゆる「学級活動」。学活、特別活動をブレンドした教科になります。内容的には3年生から6年生が地域について学びます。7年から8年は、福部の未来、地域の未来について自分にできることを考えて探究していきます。9年生は、自分の生き方について考えていきます。卒業研究と言って我々呼んでいますが、そんな形で発達段階に合わせて「みらい」を作っております。以前は「未来科」と言っておりましたが、今は「みらい」という教科です。ちなみに1、2年生はありません。「総合的な学習の時間」が無いので、3年生以上となっております。ちなみに前任校の湖南学園では1年生からこの特別な教科を作っていました。

では、「みらい」の内容ですけれども具体的にはここに挙げているようなものですね。「地域」、それから「自分自身」。それから「地域プラスアルファ」「ふるさとキャリアの視点」ということで、さまざまな地域のネタとか人と人と触れ合いながら勉強を進めていきます。

では、具体的な実践例を紹介いたします。まずですね、6年生から7年生にかけて行われる。普通の学校じゃあ、無いですよ。6年から7年またぎなんてね。6年生で植え付けですね、ラッキョウの植え付けをします。1年後、7年生になるとそれを収穫します。自分たちが植えたラッキョウを収穫します。そして、収穫したラッキョウを加工します。根を切ったり、皮をむいたりして綺麗にします。そして、漬け込みをして商品化。商品として売るというわけではないですけどね、一つのパッケージにしていって。これを、修学旅行で配っているそうです。今年はちょっと修学旅行がどうなるのか何とも言えませんが、まあそんな活用をしています。地域の産業ですね。ラッキョウ農家さんのお子さんも大変多いです。

それから5年生は、地域の探検を行います。農業的なこと、それから地理的なこと。様々な多方面で調べていきますけ



れども、鳥取大学の乾燥地研究センターに行ったりだとか、あるいは、水車を見たりだとか。水で運ぶ水運ですね、そんなものも勉強いたします。農業に対して水がいかに貴重だったのかということも勉強していくわけですね。ジオパークということもあり海岸での様子についてですか、こういうことも勉強いたします。

それから、義務教育学校ならではの行事を紹介したいと思えます。入園式ですね。これは幼稚園の入園式。1年間を見ていきます。これは入学式になります。1年生の。9年生がお世話をしていますね。それから地域の方と一緒に学ぶこれ、「みらいカフェ」という6年生で行う、「みらい」という教科の中で行う、自分たちでメニューを作っていますね。おもてなしをするといったような授業です。

それから今年の運動会です。実はコロナの影響ですね、2日がかりの開催。密を避けるために学年をまたいで、5年生までと、それから6年生以上に分けて。これは5年生までの運動会です。これが6年生以上の運動会ですね。まあ、一般的な運動会ですが半日で終わりました。面白いことですね、小さい子たちの運動会を、大きい子たちが窓で休憩時間に見ている様子です。まあこんな状況が本校ならではの様子かと思えます。

それから生徒会に値するものとして、「自治会」という組織がありましてこれは自治会総会をやっているところです。5年生以上の参加になります。5年生から入って、会議に参加するという事です。

あとは伝統ものですね。太鼓がありまして、「砂神太鼓」といいます。砂の神様の太鼓ですね。これを6年生が取り組んでいる様子です。先週、文化祭ができなかったんですけども、参観日に発表いたしました。

あとは、縦割り活動。学校を縦割りに分けて、4チームに分けて競い合うようなイベントがあるんですけども、これは駅伝をやっている様子です。緑チームが走っている姿がまあ分かると思えます。

最後に儀式になりますね、もう一気に春になってしまいますけれども、昨年の卒業式の様子です。答辞を読んでいる状況でしょうか。珍しく、鳥取市では珍しくこのブレザー姿ということですね。それから卒園式。1年間の幼稚園の生活が割と楽しいですね。それからこれがブロック修了式。これ、昨年ブロック修了式できなかったで前の校長が一昨年に渡しているときの様子です。

では、実際に義務教育学校の良さをお話したいと思えます。時間もかなり押していますので、ちょっと早口になるかもしれませんが。異学年のコラボ学習。いわゆるコラボ学習というのは、例えば、4年生と8年生が勉強する、同じ時間に一緒に勉強するなんてのがコラボ学習です。「児童生徒の学習意欲の高まりや質の高い学習につながった。」来月も予定しております。理科の授業を予定しております。例えば、湿度と、それから4年生の「水の行方」。これをコラボさせるというようなことを今、実践を予定しております。

それから、2つ目ですけれども、柔軟な教育課程の編成。専門性を活かす。これも話をしてきた通りです。

それから3つ目。これ意外にですね、先生の立場としてはありがたいですね。職員の空き時間が確保されたこと。空いた時間にいろんな作業ができる。そうすれば、時間を有効に使い働き方改革につながるということですのですごく大きいなと思っております。

それから4番目ですけれども、小学校籍の先生と中学校籍の垣根が無くなります。両校種の持っていた長所を感じるようになっていきます。最初はちょっと違和感があるのですが、それが上手いこと機能すると本当に9年間を見据えた良い教育ができるんだということです。

それから5番目。子どもサイドですけれども、縦割り活動により他者を思いやり、優しい気持ちが育つということですね。本当に、楽しそうに過ごしている姿をみると優しい気持ちが育っているなというのを実感いたします。

それから課題の方ですけれども、まあ、いくつか課題があります。子ども向けの課題。それから職員向けの課題。ちょっと分類しながらいきたいと思えます。まず、1つ目は子ども向けですね。これはですね、進級が無いということですね。節目が意識しにくいということですね。ブロック修了式とはあるんですけども、連続性は非常にメリットなんですけれども、ある意味頑張りどころが無いということも一つの部分があるんだと思えます。精神面の成長のきっかけがなかなか持たせづらいということです。

それから2つ目はですね、教員サイドですけれども、一人で複数学年。これは、小規模校の宿命ですけれども、全ての授業に出るとなると割と大変です。国語の先生が全学年に出てらっしゃる。問題も作らないといけなく、採点もしなきゃいけない。本当に。成績も出さなければならぬ。実は、皆さんが思っている以上に、問題を作ること成績を出すことは大変な仕事なんです。そういったところが課題として負担が大きいという声があがっております。

それから、前期課程の6年生から一気にですね、後期課程。中学校の生活が始まりますので、まだ体も大きくなっていない中で苦しい状況が出てきます。制服を着なきゃいけないこととか、50分授業になることとか、あるいは午前中の休憩が全く無いというか、10分休憩しかないということでもちょっと負担が大きいなと感じているようです。

最後。また職員向けですけれども、小中一貫校の時代と比べて教員数が減っています。効率が上がったということで、事務の先生も、養護の先生も、教務の先生も減っていますので、一人当たりの仕事量が増えたなというのが正直感じているところです。

では最後に私の雑感ですけれども、このように考えてみました。1つ目はですね、前任校と一緒に勤めた先生から聞いた言葉です。心構えというようなことで、ちょっとお聞きください。

どうしてもですね、義務教育学校に行ったときには、これまでの仕事のペースをいかに持ち込むかを考えるんですけども、それでは通用しないということです。小学校の発想を持ち込む、中学校の発想を持ち込むでは成り立たない。もう、義務教育学校の職員として努める。これが大事だと。もう、

これが無いとですね、本当に自分がしんどくなると思いますので、ちょっとそういった意識を持って皆さんもいずれ、先生になった時に義務教育学校でお勤めになることがあるかもしれませんけれども、そんな意識を持っていてもらおうと良いかなと思います。経験は無いですけれども、イメージだけでも持っておいてください。

それから2つ目ですけれども、9年間。本校で言ったら10年間になりますけれども、一貫教育は本当に素晴らしいと感じております。実は私、福部未来学園に今、勤めているんですけれども、去年まで勤めていた湖南学園に週一日だけ行ってですね、実は今日行って授業してきました。

たまたま9年生の給食の時に話をしたのですけれども、「君たちが1年生の時に、先生もこの学校に来たんだよ。」と。1年生に入学したときから卒業まで居られるっていうこの魅力は、本当に素晴らしいものですね。当然そんなに長いこと勤められる先生はほぼいないのですけれども、そんなふうに個人的には感じております。系統的に9年間の教育課程を作っていくというのは大きな醍醐味です。

それから、「地域との共同の中で成長する姿」です。いわゆるですね、地域の要望で生まれた学校ですので地域の中で育っていく。ですから、地域からすごくいろんな恩恵を受けております。ゲストティーチャーだとか、様々な支援があります。それに対して我々も地域に返せることは返していく。イベントに参加したりだとか、ボランティアに参加したりだとかそんな形でWINWINな関係を保っていく。そういったところでも地域の中の学校だなと実感して子どもたちもすくすくと成長しているのかなと思います。こんな良さを感じております。

私も9年目の小中一貫校、義務教育学校の生活になっておりますので、もし次に小学校に行くだとか中学校に行くとなったときにこの経験がどう活かせるのかなと考えながら今、仕事をしています。これから、義務教育学校増えていくと思いますけれども、良さをぜひ継承して広げて行けたらなと思っております。

はい。では、長々とお話をしましたけれども、以上で私の話を終えさせていただきます。ありがとうございました。

(石本) ありがとうございます。福部未来学園の方のお話にありましたけれども、ある程度数年の歴史があるところでしたけれども、次は、江山学園の、稲垣先生からお話をいただきます。江山学園の方は今年度からということで、またちょっと違った面も、お話いただけるのかなと思います。では、お願いします。

(2) パネリスト講演：

稲垣彰浩 鳥取市立江山学園

(稲垣) みなさんこんにちは。今、ご紹介にあずかりました、今年度4月に開校したばかりの江山学園から参りました稲垣と申します。よろしく申し上げます。

今年度開校した「義務教育学校」ですので、私自身も義務

教育学校を半年と、すこししか経験がなく、中学校は何校か経験しましたがけれど、中学校と義務教育学校との差を結構感じているところです。そういった点をご紹介出来たらということでスライドを作らせてもらいました。分かっている範囲で話をさせていただきますが、またあとでいろいろと質問をいただければと思いますのでよろしくお祈りします。

今スライドで映しているのが、本校の今の状態なんです。実はこの校舎は、3校が一緒になった際に、そのうちの1校、美和小学校の校舎をそのまま使用してあの中心に「鳥取市立江山学園」と書いてあります。この看板だけ付け替えたというような状況です。右側の方にちょっとだけ仮設校舎が見えていますが、今ここで主に生活をしています。職員室は真ん中の管理棟に入っていますので先生は真ん中で、生徒たちは右側のプレハブ校舎というような生活スタイルをとっています。ちなみに新しい校舎は令和4年度に完成をする予定になっています。

これは、江山の風景です。私の担当する教科は美術ですが、美術室の前の、3階から江山地域を眺めると、こんな風景が広がっていて、遠くの方はとても広大で雄大な景色が広がっていてなんて素晴らしい所なのだろうと思ながら毎日授業を行っていました。晴れるととっても素晴らしい景色を見ることができました。

場所は、千代川沿いに国道53号線を南に約6km、鳥取駅から6km辺りに位置しているんですけれども、目印があまりなくて唯一あるのが鳥取刑務所が近くにあるという場所です。ただ、この鳥取刑務所についてもいろいろと交流のイベントなどを行っており、江山中学校のときには吹奏楽部がよくコラボでいろいろな行事に参加しているので、それはそれで一つの目玉になっているのかなと思います。江山地区に、さきほどの砂丘ラッキョウのような目玉と言えるような産業が無いので、そこでどんな特色を生んでいくかということが課題だと感じているところです。

県内で、3校が1校になる義務教育学校というのは、これまでに無く、県内初になるということです。ですから小中連携と小中連携が同時に求められることになりました。しかも、大抵、3年以上かけて準備されるのですけれども、本校の場合はそういう話が職員の中で出始めてから準備したのが、本当に1年ぐらいで、スピード感を持って作られた学校かなと思っています。その3校というのがこちらの3校です。一番上が旧江山中学校。真ん中が今、生活している旧美和小学校。下が旧神戸小学校です。

生活している仮設校舎はこのような外観です。その下が校章です。仮設校舎は壁が薄いこともあって音が響きますけれども、思ったよりも面積が広くて、しかも全室が冷暖房完備なのでなかなか快適です。今年の夏は暑かったんですけれども、冷房をかけて、快適に過ごすことができました。最新の仮設校舎は居心地が良いです。みなさんが赴任される場合に仮設校舎だという場合があるかもしれませんが、まんざらでもないということです。

校章についてもすこし触れておきます。公募で県外の方

が応募された校章が採用されているんですけども、江山に関わる様々な情報を得て作られたようです。真ん中に花が描かれているのは、江山にゆかりがある、桃の花であったりとか、桜の花をイメージしているようですし、千代川をイメージした様な波しぶき。青葉は、すくすく育ってほしいという願いを込めて作られているそうです。

ちょっと前置きが長くなりましたけれども、こんな感じで今日はお話をしたいと思います。まずは、課題を挙げておきたいと思います。義務教育学校として立ち上がっていくのにどうしても課題は切り離せない課題が、あるからこそ義務教育学校は誕生したと言っても過言ではない、そういう性格をもった学校であると感じていただきたいと思います。

それから、本校の「学校教育目標」。「学力の向上」。本校が取り組んでいる「発信力の育成」について。「先進校」。江山学園ではないですが、京都にあります学校の取り組みもちょっと紹介させてください。それから「新設教科の取り組み」「義務教育学校で働くには」ということで最後にまとめたいと思います。

地域や学校が抱えている問題は、結構共通点があると思うのですが、一つ目に、少子化という問題があります。子どもが少なくなるとどうしても学校に在籍している子どもの数が少なくなり、統廃合を繰り返す中で学校が消滅してしまうという現実があります。学校が無くなってしまうと、若いお父さんお母さんが住まなくなっていく。そうすると地域自体に若い大人の方がいらっしやらなくなって、だんだん過疎化が進んでいき、村または町自体が消滅していくという深刻な課題を抱えている地域が多いです。実際京都の方で、先進校を視察した際にそういう課題がまず大前提としてあって、それを何とかするために小学校中学校を一緒にした義務教育学校にということで、進めてこられたという話をよく聞きます。まずはふるさとを知るといったところにつながっていきます。

それから2つ目に、同じ、小さいころから同じメンバーで生活している人が多いので、なんとなく仕草をすれば相手につながるといような、独特のコミュニケーションが子どもたちにあり、あまりきちんと説明をしなくても意思疎通ができてしまうという、良いように思えて良くない問題があります。将来他県に出て仕事をする際には、デメリットになりかねない課題を抱えている話はよく聞かれます。ということで、発信力を育成するということにつながりました。

そこで江山学園では、目指す子ども像を、「自ら学び、豊かに表現する子ども」「思いやりの心を持ち、進んで人と関わる子ども」「心も体も健やかにたくましく生きる子ども」で、そのまま知・徳・体と結びついているような子ども像を描きました。それを受けて、学校教育目標は、「学びを自らの生き方につなげ、未来を切り開こうとする児童生徒の育成」としています。

では、どういうものを発信力として捉え、どのように発信力を高めていくのかということで次の3つを考えました。

発信力の中には一つ目に自分の夢や成長していくキャリア教育的な中身と、それから地域を理解して関わっていくより良くする力。これはふるさと教育に関わる内容。それから情報機器を活用していくような力が必要なので、情報教育。この3つに力を入れて発信力を高めていこうというのが江山学園の特色ということにしました。ただ、そういった力をつけるのと合わせて、学力を向上させていくのが大前提ですので、この2つを柱にして進めていくことにしています。実際の取り組みですが、こんな様子です。

学力向上は今でこそ、コロナウイルス対策として、タブレットが注目を集めていますけれども、江山学園開校の計画段階では、タブレットを使って学習をどんどん進めていくということをウリにしていこうと考えていました。これは、中一、7年生の様子ですけども、「終学活」「帰りの会」の前に10分ほど時間を設定して、毎日、タブレットドリルを進めていくという取り組みを進めていきました。

それから、発信力の育成の一部ですが、行事が無くなり、思った通りに学校教育が進められない中で発信力の育成として、例えば左側は、他学年とのポスターセッションをしたり、右側では、後期課程の中学生に当たりますが、「ワールドカフェ」という手法を用いて、グループをシャッフルして互いに自分の成果を共有していくという取り組みを進めていきました。

先ほどお話しした、京都の大原学院は全国的な先進校で、そこでどんな取り組みをしているのか。学力向上について聞いてきました。その中で非常に面白い方法だなと思ったので紹介させていただきたいのですけれども、大原学院では、一回覚えてはいるはずの内容なのに何が学力低下につながっていくのかということ进行分析したら、放ったままにしているから、だんだん忘れていき、学力が低下してくと考えたそうです。

じゃあ忘れてしまわないために、繰り返し定着をさせる時間や機会を用意したらどうだろうかということで、中学校の時に取組まれた方もあるかもしれないですけども、「新研究」という高校受験用の問題集一冊に絞って、これを繰り返し、繰り返し何回もやっていくという仕組みを作られたことで、学力の向上につながられたそうです。京都の中では、県内で上位に食い込むくらいの全国学力学習状況調査の結果をたたき出したということで聞かせてもらいました。

さらに面白いのが、鳥取でよく聞くのが、「家庭学習を定着させるのが難しい」という声なのですけれども、基本的に今言った取り組みを、学校でも、家庭でも、全く同じにして学校の延長線上に家庭学習を持ってこることで、負担無く、家庭学習を進めていくことができ両方定着させることができたという話を聞いています。

これが実際のノートです。左側の方に自分がまとめた内容を真ん中の方に結果が書いてあって、どれぐらい達成できたかという達成率で自己評価をしていきます。それが学習評価の一部にもつながっていきます。特に関心に思ったのが、だいたいどんなグループであっても、成績がなかなか



振るわない、なかなか取り組みが難しいというお子さんが何人かいらっしゃるんですけども、そういう人があんまりいないなという印象を受けました。勉強できる子はできて当然なんですけれども、なかなか取り組みにくい子たちがそうやって一生懸命できているってところがこの取り組みの魅力だと感じたところです。

江山学園に話を戻しまして、「新設教科」。本校では、こんな感じに取り組んでいます。福部未来学園とはちょっとまた違っていて、初等が1年生から4年生まで。中等が5年生から7年生。それから高等ブロックが、8年生と9年生ということです。全国的に成長・発達の段階に応じた区切りがこのようになっているようですので、それを受けての区切りになっています。

学習の中身としては、新しく「新設教科」と本校では呼んでいるのですが、学校独自で設定ができる教科を「江山かがやき科」と題して、総合的な学習の時間と学活の時間を組み合わせた形でやっています。総合的な学習の時間の内容と似通ったところもあるのですが、初等ブロックでは、まずは地域を知ること。中等ブロックでは、その中から課題を見つけていくこと。高等ブロックでは、それを基にして地域にどう還元していくのか、地域をどうより良くしていくかというところをテーマにして進めていきたいと考えています。

それと合わせて先ほども言いました、「ICT活用」。情報教育ですけども、これも切っても切れませんので、このように計画をしています。ポイントとなるのが、5年生でWordの操作ができるようになること。要するにテキストの入力ができるようになるということです。キーボードを使って小学生がローマ字入力するのはかなりハードルが高いですが、これを目標にしています。それから6年生でパワーポイント。プレゼンを行うことができるようになることが目標です。さらに7年生はエクセル操作で分析を行うことができるようになるというところを目標にしています。

本校の今年の取り組みです。十分な形ではできていないですけども、次のような取り組みをしました。これは、10月ぐらいの活動ですけども1年生が地域の方からいろいろと解説を受けながら地域について知っていく活動です。地域にはこんなところがあるんだ、こんなものがあるんだというようなことを楽しく学ぶことができていました。こちら1年生ですけども、サツマイモを育てながら地域の方と関わっているいろんなことを学んでいきます。そしてこちらは3年生ですけども、地域にあるピザづくりをされている方がいらっしゃいましてその方からピザづくりのやり方などを教わりながら関係を深めていっていました。

それから地域の川で川遊びをしている様子です。4年生が行っています。学年が異なる2学年で一緒に活動している様子です。そしてこちらは、5年生ですけども、米作りをテーマにしてJAの方から解説をいただいたり、実際に自分たちが地域の方と関わりながら田植えを試みたりとか。収穫なども行う予定です。そしてこちらは8年生。中学2年生ですけども、本当でしたら職業体験学習なんかを

やる予定だったんですが中止になってしまいましたので、地域の方の協力をいただきながらゴーヤの苗を仮設校舎の前に植えようとしているところです。

先ほども異学年の交流について触れましたけれども、例えばこんな活動をしています。児童生徒会役員選挙では、小学校5年生から一緒にお兄さんお姉さんと関わりながら選挙活動を行ったり投票を行ったりする経験をしています。

それから運動会ですが、本校では1年生から9年生まで全校で行うことができました。その中で中学生にあたるお兄さんやお姉さんが世話をしているような微笑ましい光景をたくさん見ることができました。

それから縦割り活動ですけども、これは「縦割り掃除」という学年を縦に割ったグループの中で掃除活動を行うようにしています。その中で上級生が説明をしたり、ルールを守らせたりというような活動をやっているところです。

最終的には9年生で、地域にこういうことをしてみたらどうだろうかという提言をしていきたいと思っているのですが、その段階にはまだ到達できていないですし、今年度は中止になったことも多くて難しそうですので大原学園がやっておられる取り組みが似ているので紹介させていただきます。

地域への提言テーマとして、「かやぶき屋根について」とか、「木を活用しよう」、「旅館にとまらないなら大原キャンプで一夜を明かそう」、「フードコートを作ろう」、「空き家リフォーム」、「大原PR動画を作る」、「商業者に英語を」、「大原1日フリーパスを作ろう」といったように地域の課題を解決するためにこんなことができないだろうかというテーマで研究されているのが良く分かったと思いました。

最後の、まとめです。私自身に言い聞かせるという意味で皆さんにも紹介したいと思うのですが、まず1つ目は学校や地域の課題を十分に把握することが必要だと感じています。必ず義務教育学校には新設教科、特設の教科がついてくるんですけども、それは学校であつたりとか、地域の課題を解決していくことが目標になっていると思います。そこをきちんと把握しておかないと、例えば、自分が良かれと思っていることが学校の方針と同じ方向に向かっていかないということになると、評価につながらなかつたり逆に指摘を受けたりなんてことにもなりかねません。一般の中学校ではよいことかもしれないですけども、義務教育学校ではよくないなんてことも起こりかねませんので、そこはやはり確認しておく必要があると思います。

それから2つ目に、小学校、中学校文化の違いをよく理解しておく必要があると感じています。ちょっと偏見が含まれているかもしれないですが、小学校はトップダウン型の指示系統で、中学校では逆にボトムアップ型かなと感じたりします。それはなぜかという、小学校は学級担任制で、学級の中で一人の先生がいろんな教科を教えています、みんなで一斉の取り組みをしようとした場合、リーダーとなる管理職の先生がこうしますよっていう具合に言ったことをスムーズに降ろしていく必要があるんだろうと思います。逆に、中学校は教科担任制で、みんなで協力をしていか

ないと全体の取り組みになりにくいところがあるため、自主性を大事にしたボトムアップ的な指示系統が必要だと感じています。ちなみにあの、高校の先生とも交流があったのですが、ちょっと大学的といったらいいんでしょうか。研究が大事にされるような雰囲気があると感じました。

3つ目は、先ほど福部未来学園の林田先生もおっしゃっていましたが、子どもは9年間で考えていくべきだと思います。私が今取り組んでいるのは、小学校から中学校の最後まで見渡した時に課題だと思っている持久力が持たなくて、「作品作りをする際に途中で飽きてしまう。」とか、「道具の使い方が発達に応じて習得できてきていない。」というところを基にして、「切り絵」という題材であれば小さい子から楽しく取り組むことができると思いやってみています。勿論、段階に応じて難易度は変えているのですが、その中で持久力や楽しみみたいなものがすこずつ積み重なって、段階的に教えていくことができるんじゃないかと考えています。その結果が徐々に見えてきつつあるので、楽しみにしています。

ということで、江山学園の紹介を以上で終わりたいと思います。また、義務教育学校の様子が少しでも感じてもらえたらありがたいと思います。今日はありがとうございました。

### (3) 質疑応答

(石本)では、お二人の先生にお話をいただきまして、義務教育学校について今まであんまり聞いたことがなかったりとか、イメージできなかった方も、少しイメージできたのかなと思います。鳥取は、特にこの東部では、今日ご紹介いただいた2つ以外にも鹿野学園と湖南学園と義務教育学校があって比較的義務教育学校はたくさんあるかなと思うんですけど、特に鳥取の場合はそういうどちらかというところと人数が少ない地域での義務教育学校というところがあって、また地域の小中一貫校とまた違った部分があるかというふうに思うのですけども。

ちょっと補足的な話をさせていただくと、途中、話の中にも、文科省が義務教育学校のメリットデメリット等がご紹介いただいたのですが、一番大きな問題は、結局義務教育学校のメリットもデメリットも特にエビデンスが無いというか、根拠がないですよね。「何となくこういうメリットがあると思われる」というところがまずすごく問題が大きいなところがあるんですよね。

日本の研究で、ある程度人数を対象とした研究。つまりある程度信頼のおける研究でいうと、僕は心理の人間なので、心理学的な人間科学の研究でいうと、義務教育学校っていうか小中一貫校に対する研究ですけど、小中一貫校すると特に4・5・6年生。いわゆる、小学校の高学年。中学年である高学年である子たちの学校適用とかね、精神的な健康に差があるという部分、結果があるんですよね。つまり、通常の学校の方が適応がいいということなんですね。ということもあるんですけども、その辺がね、先ほどもお話しした

みたいにそういった研究っていうのはどちらかというところ、多分ちょっとどこの地域がいいのかっていうのははっきり示されていないかったり、何とも言えませんけれども、もうちょっと規模の大きい学校なのでちょっとまたそのままね、その話がこちらに来るかどうか分からないですけども、でもまたそういった課題もね、考えられるのかなというところもあります。

もう一つの課題はやっぱりこれは現場の先生方等の問題ではなくて、県とかの持つ課題だと思われまうけども、今日ご紹介いただいた中でも、学校のね、学年の区切りが違うんですよ。その義務教育学校ごとに3ブロックとかに分けてても、その3ブロックの分け方が違うんですよ。その分け方の違いにも特に根拠が無いんですよ。じゃあ、何でここはこうで、ここはこうなのかってことを合理的に説明できるかというところ、別に説明できるわけでもないというのが非常に問題が大きくて。もっと言えば、まあそういうのがあったとしてもそのあと検証してやってやっぱりこの区切り方がよろしくないから今度こう変えようねっていう、そういうことが例えば何年間検証して変えますということがあるんじゃないんですけども、特にそういう検証と、改善するっていうプロセスを県が示しているわけでもなくて、そこがやっぱりちょっと大きな課題になってくるかと思えますね。

お話があったように、義務教育学校っていうのは今後増えていくと思いますし、僕自身スクールカウンセラーで小学校中学校に出ると、先ほど最後の方にもお話ありましたけれども、小学校中学校の文化っていうのがありますし、学校によっては地域によっては小中の連携っていうのがあんまり上手くできていないところもあつたりするので、そういった意味ではやっぱり小中の先生方が一緒に働くっていうことのメリットも、体感としてはすごくよく分かるんですけども、やはりそこが本当にどうなのかっていうところを支援していくっていうことも必要になってくるかなってところがあります。

みなさんからも、ご質問をお聞きしたいと思うんですけども、こういうところからまず私の方から、先生方にご質問させていただきたいと思うのですけれども、学力の話もあるんですけども、先生方から見られた実感としての、「学校適応」というとちょっとややこしいのですけれども、学校に楽しく来るっていったような感じであったりとか、来るだけではなくて本人の精神的な健康とか、まあ、そういった部分ですよね、についてどう感じますかね。その一般的な分離型の学校と、どう違うのかなというところの印象についてで構わないんですけども、お聞ききたいなと思います。先生方ちょっとその場でご回答いただいてもよろしいですか。

(林田)正直なところ、違いと言いますか。学年、それから実際人数、20名以下であったりとか20数名ということですので、発生率で言ったら割合とその不適応、多いのかなと思ったりしますが、学園なりの傾向の方がウェイトが高いのかなと思っております。

ずっと一緒に過ごすことの良さもあれば、苦しさもある。小学校のときにリーダーだった子が中学校の教育課程に入って、少しだんだんとエネルギーが無くなっていく様子も見てきましたので、先ほどのデータの方も聞かせていただいて、実際のところ、検証まではしておりませんので、何とも言えないところもありますけれども、そういった視点で今後も見ていくことも大切なことだと思います。

(石本) ありがとうございます。

(稲垣)美術教科としての話に限られるかもしれないですけど、仮設校舎の構造上、美術室の中に保管している作品が廊下からよく見えるというような状況です。例えば中学生の生徒たちが作った作品を小学生の児童たちが見ていて、「うわあ、すごいなあ。」というような会話が割と頻繁に発生しています。その様子を、作った本人たちが聞いたりすることで、自然と関わりが多くなります。また、上級生にとっては、小さい子たちが自分をまるでヒーローのように扱ってくれているような雰囲気があったり逆に、児童たちは、お兄さんお姉さんのすごい成長した様子を見て「ああ、僕も私もあんな感じになりたいな。」なんて言うような、そういう交流が生まれてきて、学校の中に夢を感じることができる場面が多いんじゃないかと感じています。

(石本)ありがとうございます。もう一件だけちょっと若干、意地悪な質問が多くて申し訳ないんですけど、今の話とつながるんですけど、そういった意味では、どちらかというとちょっと未来学園の方で言うと、年長が入っているって形になるんですけど、幼稚園の方からすると、年長が抜けているというのは非常に大きなダメージだと思うんですけど、やっぱり年中、年少っていうのは、年長を見て憧れているんなことをする。ものすごくそれを特に小中よりもはるかに大きな影響を与える部分があると思うんですけど、その年長が抜けているというのはやっぱり幼児教育にとってはかなり大きなダメージだと思うんですけど、逆に言うと、それだけの犠牲を強いてでも、その幼稚園が入っているメリットっていうのをどのように感じられるかっていうことも、ちょっとお聞きできたらなと思うんですけど。

(林田)そうですね。あの、幼稚園は、1年間だけ本学園で生活しているんですけど、その今おしゃったような視点で考えたことが実はございませんでして。保育園とは近くですので連携を当然取っておりますし、一緒に行事等には幼稚園生が、さくら組というんですけど、保育園生と交流しているのは当然、結構な機会はあるんですが、日々の生活は全く別です。その辺のところも正直なところよくわかっていないのが実情です。

(石本)それでは、みなさんからのご質問もまだ、時間もちょっと残っておりますので、みなさんからもご質問もお聞き

したいというふうに思うんですけども、前回のパネルの時もそうやったんですけども、終わった後で個別に質問に行かれる方がいらっしゃるんですがもうそれは今回は無しです。あの、それはなぜ無しかって言うと、先生方の、時間を余計に拘束することにもなりますし、全体の場で聞いていただければ、当然その質問と回答を全体で共有できるにもかかわらず、個別で聞いたら一人しか共有できなくて、すごくデメリットしかありませんので、勿論、全体の中で発言することに抵抗があるのは分からないでもないですけども、その抵抗を越えて、是非聞いていただきたいなというふうに思っております。

ということで。そういうふうに余計ハードル上がっちゃったら申し訳ないですけども、何か、お聞きしたいこととか、本当に基本的なことでも構わないと思うんですけど、本当に、みなさん自分だけじゃなくて、みんな多分あんまり何も分かっていないところから今日のお話を聞いていると思いますので基本的なところの確認でもいいですし、個人的な何か質問とかでもいいですから、ご質問ある方、是非、挙手いただければなというふうに思いますがいかがでしょうか。ちょっとでも気になることがある方は今聞いてください。無いですか。片山先生の方からはいかがですか。

(片山)今お二人から二つの義務教育学校のお話を聞かせていただき、それぞれ特徴があったり、個性があったりしたんですけども、みなさんの、中には、義務教育学校を経験された方っていうのが無いみたいですが、皆さんたちがじゃあ逆に、教員になったときに、普通の小学校中学校ではなくて、義務教育学校で勤めてみたいと思われた方はどれくらいいらっしゃいますか。ちょっと、やってみたいと思われた人は手を上げてください。

では、その気持ちを聞いてみたいと思います。どうして義務教育学校で勤めたいと思わなかったのでしょうか。

(学生A)小学校と中学校が一緒、ずっと9年間一緒だと、すごい生徒との人間関係がなんか、すごいグループ化というか、してそうでなんか、難しいのかなと思いました。

(学生B)

義務教育学校だったら小中両方の免許がいるって言われたので、それがちょっと厳しいのかなと思いました。

(学生C)

私は、義務教育学校の制度とかはいいと思ったんですけども、小学校の免許しか取らんとしたら自分は厳しいかなと思いました。

(学生D)

私も一緒に、小学校と中学校どちらも免許が必要だと思うので、ちょっと・・・。

(片山)はい。ありがとうございます。小学校と中学校の免許、



まだ今は、その、両方、持っておられなくてもいいですよってなってますけど。いつか小学校に行っても中学校に行っても両方の免許がいるっていう時代がこれから来るかもしれません。何故かという、こういうふうに一貫校が増えてきたり、義務教育学校が増えてきたら両方いるってのはあるんだけど、でも小学校の高学年で今度は教科担任制をしようっていう流れがこれから出てくるかもしれません。そうなったら、小学校でも中学校の免許が必要だということになっていくっていうことも考えられるので、今はみなさん実際には、どちらかを取ろうとしてらっしゃるっていうのはあっても、いずれかは、もう一つ小学校、あるいは中学校も取ってくださいねという時代がやってくるかもしれないということ、頭の隅にちょっと残しておいてほしいなというふうに思います。みなさんにとって、今、手が挙がらなかったってというのは、義務教育学校がどんなものか分からないというのもあるし。人間関係のことも言われましたよね。ずーっと一緒だからグループとか、人間関係が固定化してしまっ、そこで煮詰まってしまうたら解決に至らないんじゃないかという心配がありますけれども。

でもやっぱり、先ほど、聞いたのは、確かに鳥取県にある義務教育学校は規模が小さいので、本当にそういう人間関係の行き詰まりってというのは、多分何%かは必ず確率としてはあります。だから、じゃあそれをどうするかってなった時に、それは、やはり、先生方が打破する方法を考えるのですよ。どうしたらいいかっていったら、やはり、他校と連携する。他校の、同じ学年の生徒と、今だったらテレビ会議システムでもできますし。それから、自分の知っているものとは全く違う価値観を得られるように、そういう人々と出会う機会やそういう場面を作っていく。自分を今まで見てきてくれた友達ではなくて、それ以外の人たちとの関わりをどんどん増やしていくこと。小さければ小回りが利くっていう強みがあるので、それをじゃあどう活かしていくのかっていう発想も入れていけるんじゃないかなと思います。

以前に、東京で各学年3クラスある、900人規模の小中一貫校にお邪魔したことがあります。そこは何故、一貫校という道を選んだかという、そこは、生徒指導の超困難校でした。だからそこは、小学校と中学校が一緒になってそれぞれの知恵を出し合っ、一貫校の中で生徒指導を改善していく、問題行動を減らしていくっていうことにね、尽力されながら、学力向上にも努められたという学校でした。だから、いろんな学校にはそれぞれの課題があるんだけど、でもそこには先生方の知恵を結集して、共有していきながら

みんなで力を合わせて、より良い学校を創ろうということであれば、小学校とか中学校とか義務教育学校とか、そういう学校の種類に捉われないこと、みんなで邁進していくっていうことが実現できれば、より良い学校は、みなさんの手で作ることができるんじゃないかなっていうふうに思っています。みなさん本当に、初めから無しっていうんじゃない、可能性っていうのは、必ず、みなさん持っていてほしいなというふうに思うし、ひょっとしたらこの中には興味があった人もあったかもしれませんが、これから先、また、もう少し自分の思いを温めていって、教員としての自分のこれからの成長につなげられていけたらいいなと思います。

(林田)片山先生、ちょっとだけ補足をさせてください。誤解があったらいけないので。あの、免許状のことで非常に不安になっていらっしゃる方がいるんですけど、上位免許だったら教えられます。美術の先生は図工が教えられますし、体育の先生なら小学校で体育を教えられますので、そういうことを考えれば自分に対応できると思います。湖南学園でも体育の免許しかない中学校の先生が、小学校の体育を持ってらっしゃいますのでそういった運営の仕方もありますから、全てだめなんだと思わずに解決策を探していただけたらと思います。ありがとうございました。

(石本)まあ、人間関係のことも補足しておく、人間関係が固定化しやすいというのは、義務教育学校の課題ではありません。鳥取では義務教育学校ではなくても、鳥取以外もそうですけれども、1小1中。もっと言えば1幼稚園。まあ、1保育園1小学校1中学校、大部分が高校も。みたいな感じの、かなり、ずっと一緒という地域もあります。そういう地域の場合は別に、学校が分離しても、はっきり言って人間関係は固定化します。だから、先ほど片山先生がおっしゃられたみたいな工夫をやっていく必要がある、それは、義務教育学校の課題というよりは、そういう、これから日本の都市部以外で多く出てくるであろう1小1中とかそういう対応に関する学校に関する課題とさせていただきたいのかなと思います。ということで、ちょっと時間になりましたので、これでおしまいにしたいかなと思います。では、最後にお二人の先生方にお礼の拍手をしておしまいにしたいと思います。ありがとうございました。

石本雄真 (鳥取大学教員養成センター)

片山敬子 (鳥取大学教員養成センター)